九州産業大学美術館
Museum of
Kyushu Sangyo University

KSU
九州産業大学
KYUSHU SANGYO UNIVERSITY

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

令和4(2022)年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」
「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した「健康寿命」増進プログラム開発とリンクワーカー人材育成事業実行委員会
編集:緒方 泉(委員長・九州産業大学地域共創学部教授)
デザイン:小野 勝也(有限会社 フォース)
発行日:2023年3月30日
印刷:東洋紙業高速印刷株式会社

博物館が、人々を支える。

M u s e u M

令和4年度 文化庁「大学における文化芸術推進事業」
実施報告書

「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した「健康寿命」増進プログラム開発とリンクワーカー人材育成事業実行委員会
(九州産業大学美術館<代表>、九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、海の中道海洋生態科学館、田川市石炭・歴史博物館、直方谷尾美術館)

本事業のねらい・趣旨

英国やカナダ、ベルギーなどの医療保険制度では、医療従事者（主に医師）が地域のリンクワーカーを介して、患者へ適した博物館などの社会資源が行う教育プログラムへの参加を薬と同じように「処方」している。ところで、日本では団塊世代が75歳以上になる「2025年問題」に続き、団塊ジュニア世代が全て高齢者になる「2042年問題」が浮上し、社会保障費の増大、勤労世代の減少が大きな課題である。

そこで、本事業では、英国や米国などの事例調査をもとに、高齢者の「健康寿命」増進に向けた博物館浴*プログラム開発、そして医療従事者と高齢者、博物館などをつなぐリンクワーカー人材育成を目指すことで、「2042年問題」解決に向けた社会資源の新たな活用方策＝社会的処方の場となる「博物館健康ステーション」の運用、さらに地域の高齢者医療の新たな枠組みを提案したい。

＊博物館浴＝博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動

本事業の実施概要

1. 博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発講座（博物館などの社会資源を活用した、回想法、園芸療法、音楽療法などの「健康寿命」プログラムの体験、そして企画立案・実施運営の方法を学ぶ講座）
2. 博物館リンクワーカー人材養成講座（博物館などが社会的処方の場となるための理論と実践を学ぶオンライン講座）
3. 博物館のリラックス効果に関する実態調査（リンクワーカーがつないだプログラム参加者への生理測定、心理測定による効果評価の調査。対象は児童生徒から高齢者まで幅広い世代とする）
4. 博物館健康ステーションの開設（地域住民を対象に、リンクワーカーが企画立案する博物館浴プログラムを提供する、ミュージアムカフェを開催し、地域博物館における居場所づくりを進める）
5. 海外博物館、美術館などにおける「健康寿命」増進プログラム及びリンクワーカーの実態調査（海外の先進事例を調査し、今後の方策を検討する）
6. 海外の博物館関係者、リンクワーカーを招聘したオンライン国際シンポジウムの実施（海外事例の紹介、及び関係者の交流の場とする）
7. 本事業を紹介する多言語映像資料の制作（海外博物館、美術館などに向け社会資源活用の成果を公開する）
8. 実行委員会の開催（3部会を設ける。①調査研究部会②プログラム開発・評価検討部会③教材開発部会）

本事業による人材育成の目標

本事業の目的は、博物館を社会的処方の場とし、「薬」だけに頼らない地域医療の構築を目指すことである。そのためには、「健康寿命」増進プログラム開発と医療従事者と高齢者、そして博物館をつなぐリンクワーカー人材育成が鍵となる。特に、リンクワーカーとなる人材には、高齢者医療、高齢者心理、高齢者の運動、生活支援、博物館の実態、博物館浴プログラムの企画立案など、それぞれを「つなぐ」多彩な学びが求められる。こうした人材の育成は、地域に社会的処方の場としての博物館を増やすことになると同時に、リンクワーカー自身の健康寿命増進に結びつくことも期待できる。さらにリンクワーカーの活動領域が博物館に留まらず、地域の学校や図書館等多様な社会資源に拡大することも期待できる。

本事業の社会的な役割、効果

高齢者は概ね、健康な高齢者、虚弱な高齢者、要介護な高齢者を経て、天寿を全うしていく。現在、健康と要介護状態との中間の時期に位置する虚弱な高齢者は、筋力や心身の活力が低下する段階という意味から「フレイル」と呼ばれる。「健康寿命」を増進するには、この「フレイル」段階に適切な介入があると、健康状態に戻すこともできると言われている。高齢者の健康の秘訣は何か？ 1つ目に体操・運動２つ目に食事、栄養、そして3つ目に社会参加があげられる。

従って、本事業で英国、カナダ、ベルギーなどの先進事例をもとに、地域の社会資源である博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発などを進めることは、「2042年問題」で焦点となる社会保障費増大を食い止める効果が期待できる。

組織体制

実行委員会名簿

委員長	緒方　泉	（九州産業大学地域共創学部・教授）
副委員長	三島美佐子	（九州大学総合研究博物館・教授）
委員	朝烏　和美	（田川市石炭・歴史博物館・学芸員）
委員	市川　靖子	（直方谷尾美術館・学芸員）
委員	鬼本佳代子	（福岡市美術館・主任学芸主事）
委員	松村　利規	（福岡市博物館・学芸課長）
委員	塚田　仁次	（海の中道海洋生態科学館・運営本部展示部海洋動物課係長）

事務局名簿

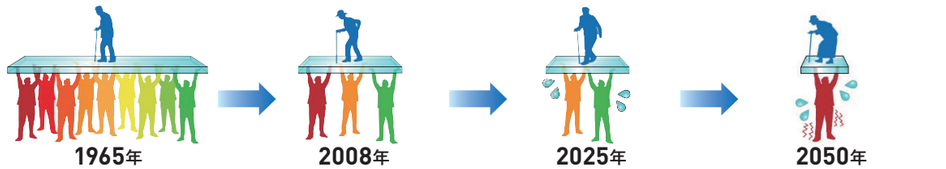
事務局長	中込　潤	（九州産業大学美術館・学芸室長）
事務局次長	永井　浩一	（九州産業大学産学連携支援室・課長）
事務局員	織田　珠未	（九州産業大学産学連携支援室・室員）
事務局員	吉田　公子	（九州産業大学美術館・准教授）
事務局員	三戸　丈治	（九州産業大学美術館・学芸員）
事務局員	福間　加容	（九州産業大学美術館・学芸員）
事務局員	四ヶ所　悦子	（九州産業大学産学連携支援室・室員）

5

「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した「健康寿命」増進プログラム開発と社会的処方の場となる「博物館健康ステーション」の運用構想図

背景

厚生労働省発表のデータより算出



1965年	2008年	2025年	2050年
高齢者1人に対して生産年齢人口9.1人	高齢者1人に対して生産年齢人口2.9人	高齢者1人に対して生産年齢人口2.0人	高齢者1人に対して生産年齢人口1.0人

2042年問題=「団塊ジュニア世代」がすべて65歳以上の高齢者に…
社会保障費の増大、勤労世代の減少が大きな課題

本事業の概要

① 博物館などの社会資源を活用した高齢者の「健康寿命」増進プログラム開発
② 病院、医療従事者と高齢者、博物館などをつなぐ「リンクワーカー」人材育成

事業計画

「健康寿命」増進プログラム開発講座
「博物館のリラックス効果」実態調査
博物館リンクワーカー人材養成講座
英国・米国の博物館事例調査
国際シンポジウムetc

大学・博物館・医療・福祉が協働する
「博物館健康ステーション」の運用、地域の高齢者医療の新たな枠組みを構築

博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発講座

プログラム開発コース

「博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発のための学芸員研修会」という名称で開催

【開催趣旨】

2015年11月、ユネスコ総会で採択された「博物館とコレクションの保存活用、その多様性と社会における役割に関する勧告」の中で、「ミュージアムは社会全体に語りかけるゆえに社会的な繋がりと団結を築き、市民意識の形成また集団的アイデンティティを考える上で、重要な役割を持つ重要な公共空間である。ミュージアムは、恵まれない立場のグループを含め、すべてに開かれた、あらゆる人々の身体的・文化的アクセスを保証する場であるべきである」と提言している。

超高齢社会へひた走る日本は、団塊世代が75歳以上になる「2025年問題」に続き、団塊ジュニア世代が全て高齢者になる「2042年問題」が浮上し、社会保障費の増大、勤労世代の減少が大きな課題である。

そこで、本事業では、今後社会的処方の場となることが期待される、博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発の企画立案・実施運営の方法を学ぶ研修会を開催する。

カナダでは、「処方箋に博物館と書く」という新たな医療保健制度が始まっている。「知的刺激/学び/楽しみの場」である博物館が、「リラックス効果の場＝博物館浴*の場」という新たな価値創造が可能になる「健康増進プログラム」を開発することで、地域の高齢者医療にどのように貢献できるかを、参加する学芸員が考える機会を提供したい。

＊博物館浴：博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動

6

研修会チラシの表と裏

表面

裏面

「ユニバーサル・ミュージアムin福岡」①

■ 講 師
広瀬 浩二郎（国立民族学博物館 准教授）
専門分野：日本宗教史・文化人類学

■ 講師から一言
前半は、昨年9月～11月に開催された国立民族学博物館の特別展「ユニバーサル・ミュージアム：さわる！"触"の大博覧会」の概要を紹介しつつ、「さわる展示」の意義と可能性について考えます。後半は、ワークショップ形式で実際に資料にさわりながら、「ユニバーサル＝普遍的」な博物館のあり方を参加者とともに楽しく議論します。

■ 開催日時
2022年7月25日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所
九州国立博物館（福岡県太宰府市石坂4-7-2）

■ 内 容
◉ 午前
09:30受付開始、10:00開会挨拶、講師紹介、参加者自己紹介、10:30講義❶「世界はさわらないとわからない-「ユニバーサル・ミュージアム」とは何か-」、12:00昼食
◉ 午後
12:55演習❶風景にさわる（1回エントランスホールの床面をさわり、紙を床に置き鉛筆でフロッタージュする）、13:15演習❷研修室での無視覚流鑑賞体験1回目（ゴム手袋、アイマスクをして「きゅうばっく」にさわる）、13:35ミュージアムホールに移動。グループでさわる体験の意見交換、13:55休憩、14:05演習❸研修室での無視覚流鑑賞体験2回目（ゴム手袋、アイマスクをして「きゅうばっく」にさわる）、14:25ミュージアムホールに移動。グループでさわる体験の意見交換、15:00休憩、15:15演習❹研修室に移動、「きゅうばっく」資料の確認。見ながらさわる体験、16:00休憩、16:10質疑応答、16:40ふりかえり、17:00終了、解散

■ 受講者数
30名（福岡25名、佐賀1名、大分1名、山口2名、大阪1名）

■ 事後アンケート

質問1
午前の広瀬浩二郎先生の講義、そして午後からのコメントで学んだことは何ですか？また、心に残るキーワードがあればお書きください。

❶「特殊から普遍性を」「点字を触る文化のシンボルに」という言葉が印象に残っています。「オノマトペ」など、妄想を刺激する言葉を使っていいのだと聞き、自分が伝わると思う言葉を堂々と使っていいのだという確信を得られてよかった。

❷「まず全体の形をさわってから、指先で部分を細かくさわる」学校の見学では、よく石炭をさわってもらっていますが、じっくり観察してもらうためにも、この言葉は使えそうです。

❸研修当日にしたコメントと重複してしまうが、「障がい者対応（バリアフリー）ではなく、マジョリティ側の価値観をどう変えていくのか」という言葉が印象に残っている。研修から数日たった今でも、どうしたら価値観を変えられるかの答えは出ていないが（明確な答えがある問いではないと思うので、一生考え続けると思うが）、その前にまず所謂マジョリティ側である自分の価値観がどんなものなのかを探る必要があると思った。

❹企画展「つなぐ×つつむ×つかむ　無視覚流鑑賞の極意」の説明で、「見えない」ではなく、「見ない」という鑑賞方法に気づかされました。視覚情報に頼ってわかった気になり、触れることは「確認」になっていました。触れる方が見るよりもわかることがあると、午後の鑑賞会で理解が深まりました。

❺企画展「つなぐ×つつむ×つかむ　無視覚流鑑賞の極意」のお話のなかで出てきた、鑑賞する「前提を変える」というキーワードがとても印象に残った。視覚中心の鑑賞方法を前提にし、そこに視覚障がい者でも鑑賞できる方法を付与するのではなく、視覚に頼らない鑑賞方法を提供することは非常に斬新だと感じた。また、この視覚に頼らない鑑賞方法は、新しい感覚を触発される体験になるだろうと思う一方で、日常を視覚に頼って生活している人にとっては、とても難しい鑑賞方法だと思った。最初から最後まで無視覚での展示を鑑賞したことがないため、この企画展に行けなかったことが大変残念だった。

❻「モノの背後にはヒトがいる」。自然界にあるモノ以外のモノが勝手に存在するはずはなく、そこには必ずヒトが介在しているのだということに改めて気付かされ、ハッとしました。当たり前と思っていたことが実は当たり前ではなく、モノの存在を意識・認識することで、そこに携わるヒトへの尊敬や敬意が生まれ、ようやくモノと真摯に向き合う姿勢をとることになるのだと学び直しました。
それはモノだけではなく、ヒトにも通じることで、表面的に見ていては、本質には辿り着けず、誤った解釈をすることも起こり得ます。あらゆる対象において、そのものの背後にも意識を向けることが大切なのだと思いました。
また、「視覚は確認型、触覚は探索型」というキーワードに、言い得て妙だと感嘆しました。2つの感覚の特徴がよくわかる言葉を選ばれており、とても印象的でした。今後、機会があれば、真似させていただきたいと思います。

質問2
午後は、「きゅうばっく」の無視覚流鑑賞法を体験しました。体験してみた感想、また班の仲間たちとの対話で気づいたことをお書きください。

❶さわり方にその人の気質が出るなぁ、と感じました。視覚でも同様ですが、同じものを見ても（さわっても）、そこから何を得るかが異なってくることを再確認しました。だからこそ「さわるマナー」を意識的に訓練する意味は大きいと思いました。
鑑賞教育で「見る」を訓練していくと、見えるもの、見え方が広がるように、触覚を訓練していけば、触覚で得られるものも、どんどん広がっていくことが体感的に理解できました。

❷身の回りの風景の描き写し、無視覚流鑑賞法の体験を通して、普段いかに「さわる」ことが確認するだけのおまけであったのかを体感し、ひょっとしたら便利なようで、とても無関心でもったいないことをしているのかもしれないと感じた。

❸前半の広瀬先生の講義で「こわいとか、大変さがわかったとか言われるが、可哀想な人の体験ではない」と言われていたことを考えながら体験したが、確かに誘導されながら歩く際はやや怖さもあった。しかしながら、鑑賞のときには「視覚を使わないことによって得られるもの」と仰っていた言葉の意味がよくわかった。特に土器ではどのようにして作られたのかについて、今まで本を読んでわかった気になっていたことが、さわる体験を通して得た理解へと変わった。

❹体験した感想は、モノの大きさは触れる範囲でないと想像がつかない。細かい模様は素手で触れた方が感じやすいが、細部まではわからない。どのような模様があるかを楽しむにはそのままでは難しい。さわることで素材や重さを感じ、印象に残り、モノへの理解を深められる。
また、気づいたことは、土器を触れていた方が質感の違いで彩色されているところ、されていないところが感じられた。そのため、想像していたよりもさわることで、わかることがあるのだと気づきました。見ているだけの私からは、同じ質感にみえていたので、見えている情報はあいまいなものだと感じました。

❺実際にさわってみて、自分の触覚の鈍感さを改めて思い知りました。広瀬先生と同じ班でしたが、先生のコメントで興味深かったのが、「頭でさわってしまった（思い込んでさわってしまった）」とおっしゃっていたことです。頭でさわるという表現も聞きなれず気になった言葉でしたが、先生は頭でさわることができるほど、本当に様々なモノをさわり、かたちをイメージに起こしてこられたのだなぁと思いました。
私は目で見ることしかしてきておらず、さわる体験を通して改めて、見た気になっていたのではないか。質感や重さなど自分のできる範囲で予測して、知った気になっていたのでは？と自分に問いかける体験でした。
一人でじっくりモノを味わうことも魅力でしたが、班の活動では、お互いモノをさわって感想を述べ、疑問などからモノを予測し、答えを見出していくというプロセスが特に面白く、刺激的で、自然と対話型鑑賞が始まっていくところに「無視覚流」活動の魅力を感じました。

❻体験中、班の方たちと対話をすることで、はじめはぼんやりとしていたモノの形を少しずつ頭の中で思い描き、見えないはずのモノの輪郭をなぞっているような感覚が得られました。実際のモノと自分の想像したモノが一致しているとの確信が得られていくにつれ、正解に辿り着けたことへの喜びが涌くのを感じる一方で、同じ班にいらっしゃった広瀬先生がおっしゃるように、頭で考え、既知のものと結びつけてしまうことで、本当の意味での触察が阻害されていたようにも思いました。まだまだ自分の中への落とし込みには時間がかかるかとは思いますが、今後も経験を積み、自館でも運用できるような形を模索していければと改めて感じました。

講義風景（広瀬先生）

風景にさわる（床面をフロッタージュ）

質問3
今回の研修会について、参加して良かったなあ、今後自分の館でこんなことができそうかなあと思う点があればお書きください。

❶最後の感想でも申し上げましたが、視覚障がい者の介助者のコメントは大変参考になりました。
「視覚障がい者にとって、数が少なくても触れるものがあるとありがたい」という言葉には、安心しました。また、視覚障がい者のために、点字による案内が必要だと思っていましたが、現状では介助者と一緒に来ることが多いのであるから、必ずしも点字は必要ではなく、館の現状では、むしろ介助しやすい案内表示が必要なのではないかと感じました。

❷今回は考古資料の鑑賞でしたが、平面作品も無視覚流での鑑賞をしてみたいと思いました。過去の事例を見るに、やはりさわって楽しめるとなると、耐久性があり全体像が想像しやすい立体作品にならざるを得ないのだと思いました。平面作品は剥落のおそれがあったり、凹凸がない画面であれば、何が描かれているかの想像がつきにくかったりします。レプリカでもいいので、平面作品を触って楽しむ機会があると、その点の打開策を得るヒントになるのではないかと思いました。

❸研修会に参加して、改めてさわることの面白さ・充実感・大切さを学びました。無視覚流は、形や質感を感じ、想像し、考えるという流れがあるので、手・頭・心を自ら動かす、広がりを持った手法だと改めて感じました。

❹研修会は、いつもは来館者に提供する側ですが、今回のように提供される側に立って体験するのは楽しく、反省する機会になります。日々の仕事に追われ、博物館の楽しさを感じなくなってしまいがちなので、研修は博物館の楽しさやわくわく感を再認識できる貴重な機会だと思っています。

❺無視覚流鑑賞法を体験する前に、エントランスで班ごとにフロッタージュをする時間がありましたが、はじめは準備のための待ち時間を有効に使うために設けられたものと思っていました。しかし、振り返ってみると、その時間のおかげで班の方との距離が自然と縮まり、体験のときには会話が弾んでいました。フロッタージュの時間がなければ、ここまでの距離感にはならなかったのではないかと思います。

❻研修を受けた翌日が当館で小学校教員の研修日、またその後には高校生が来館し体験授業することとなっていました。当初から触察をテーマとした研修をすることとしていましたが、私たちが受けた研修をそのまま実践してみて、今度は仕掛ける側としての学びを深めることにしました。そうすることで「観察→触察」の順が良いのか、「触察→観察」の順が良いのかという悩みに対する方向性がつかめた気がしています。

6-1

見ないでさわる1（ゴム手袋あり）

見ないでさわる2（ゴム手袋なし）

見ないでさわる3（さわり方を記録する）

見ないでさわる4（対話型鑑賞）

「ユニバーサル・ミュージアムin鹿児島」②

■ 講 師
広瀬 浩二郎（国立民族学博物館 准教授）
専門分野：日本宗教史・文化人類学

■ 講師から一言
前掲のとおり

■ 開催日時
2022年11月14日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催日時
霧島市隼人歴史民俗資料館
（鹿児島県霧島市隼人町内2496）

■ 内 容
◉午前
09:30受付開始、10:00開会挨拶、講師紹介、参加者自己紹介、10:30講義❶「世界はさわらないとわからない-「ユニバーサル・ミュージアム」とは何か-」、12:00昼食
◉午後
12:55演習❶研修室での無視覚流鑑賞体験（ゴム手袋、アイマスクをして葉っぱにさわる。その後ゴム手袋を外してさわる、最後はアイマスクを外して見ながらさわる）、グループで感想の交換、13:15演習❷展示室での無視覚流鑑賞体験1回目（3グループ、2人1組で1人がアイマスク、1人が誘導）、13:35研修室に戻り、さわった感想を付箋紙に書き、グループで意見交換、13:55休憩、14:05演習❸展示室での無視覚流鑑賞体験2回目、14:25研修室に戻り、さわった感想を付箋紙に書き、グループで意見交換、14:45休憩、14:50展示室に移動、学芸員から解説を聞きながらさわる、15:45全体のふりかえり、16:10休憩、16:20質疑応答、17:00終了、解散

■ 受講者数
18名（鹿児島10名、宮崎4名、福岡3名、大阪1名）

■事後アンケート

質問1
午前・午後の広瀬浩二郎先生の講義・コメントから学んだことは何ですか？また、心に残るキーワードは何ですか？

❶心に残っているキーワードは、「一般的に障がい者と健常者の2つに分けて考えることが多いが、本来は分けるのではなく繋がっている」です。
目の見える視覚障がい者（マインドが障がい者である方）の存在も初めて知りました。障がいがあるということについて、自分の知識のなさを痛感し、改めて考える時間になりました。
「私たちのことを私たち抜きで考えないで！」という言葉。体験を通して見えてきたことで、言葉の意味が理解できたのではないかと思っています。

❷心に残ったフレーズは、「見学ではなく、多感覚こそがユニバーサル」です。
現在の博物館、美術館は、資料を見て、キャプションを読むことしかできないということがほとんどです。改めて、博物館というのは「見学」に特化している施設であると思いました。
今回は視覚障がいの方も参加する研修でしたが、（講義にあったように二項対立の）視覚だけではなく、あらゆる人に楽しんでもらうための「多感覚」を大事にするという考え方は、今後非常に大切であると思いました。
その一方で「さわるマナー」の問題について、どのようにマナーを定着させるかが難しいとも思いました。さわれるコーナーを作ったとしても、野放しで「さわらせる」という行為は無秩序をつくり、結局は乱暴に扱う人と、さわらない人が出てしまうだけであるなと思います。学芸員が、なぜさわらせる・何を感じさせるかということを理解したうえで、体験事業

講義風景（広瀬先生）

見ないでさわる1

6-2

としてやり方・さわり方を案内しながら、行うのがまずはわかりやすいのかなと思いました。

❸ 心に残るキーワードは、「物との対話が者との対話に」です。大人の場合は、さわってはいけないイメージが強すぎて、さわれるときにさわれないという現象は、意外と自分が気づいていないことでした。当館では、そのようなさわれる体験をしていないということもありますが、言われてみればその通りで、大人には「博物館は静かにする所」「物をさわってはいけない所」というイメージが強いものです。参加した視覚障がい者が自己紹介で話していたように、博物館や美術館は「静かすぎて、質問や案内を頼むのを憚られるような雰囲気」のある場所であるという言葉が、研修中、ずっと頭にありました。少しずつ博物館のあり方を変えていく時期にきているというお話は、本当に切実だなと感じました。自分たちがグループワークで体験したように、モノにさわれることで、自然と会話が生まれ、情報交換・共有することで、より深く知ることや、記憶にも残ることを実感しました。

❹ どんな人や企業、組織、状況でもいえることではありますが、「nothing about us, without us」の話は、改めて学びを得るとともに印象に残りました。得てして業務でもそうですが、「当事者がいないのに、当事者の処遇や関係するものの方向性が決まる」ことがあります。当事者の意見や希望を聞かずして一体何を作ろう、決めようとしているのかと思うことは多々あります。しかしながら、当事者の意見・希望のみで、実現はしないのも確かなところです。
また、「さわる展示」の説明の中で、視覚であれば「より早く、より正確に」情報を得られるが、「さわる展示」は時間がかかる展示（モノにさわれる時間があるため）であり、史料は少なくとも質を高めて、視覚を使わないことで得られる体験をも提供することが可能であること。そして文化財である以上さわれば劣化するので、レプリカであったとしてもマナーを決めた上で、来館者との信頼関係があって、初めて実施できるものとお話いただいた時には、そのとおりだなと思ったところでした。

質問2
午後は、初めて「無視覚流鑑賞法」を体験しました。「見ないでさわる」、そして「その体験を書き出し交換する」、さらに「見ながらさわる」「解説を聞きながらさわる」という流れから学んだことは何ですか？また、仲間たちとの対話から気づいたことをお書きください。

❶ アイマスクをして、「無視覚流鑑賞法」を実践したあとは、ドッと疲れました。なぜ、短時間でこんなに疲れたのかと考えると、日頃使っていない感覚を研ぎ澄ませたこと、触角を使って脳が活性化したことがその理由だと思います。時間をかけて本物と向き合うことができるという、博物館の本来的なあり方に、立ち返ったように思います。

❷ アイマスクを使用した活動では、触れて感じたことを伝える大切さと、サポート側がかける言葉一つ一つが情報を得るために重要な役割を果たしているということを実感しました。時間をかけてさわることがいかに必要であるか、さわる中にも、「タッピングで素材の確認」「撫でることによって感じた凹凸で形を想像する」「ゆっくり触れることにより温度を感じる」など、いろいろな触感があることを学びました。
何より楽しく学べることを体験できたことが一番の収穫であり、今度は私たちが霧島市民へ伝えていきたいと思いました。

❸ 資料を見ないでさわることで、見ている人との認識の違いが生まれるのが非常に面白かったです。例えば、資料の大きさについては、見えている人とさわっているだけの人では認識が異なり、色や印象・形などで大きさを認識しているのだと思いました。どちらが正しいかよくわかりませんが、資料の常識を問いただすきっかけにはなると思いました。
一人でさわるのではなく、複数人で話しながら意見交換をすることで、楽しめるのだなと思います。視覚を制限していますが、触覚・聴覚・嗅覚を使い、口を動かすことでまさに「多感覚」だからこそ、面白いのでしょう。
さわって、その後の資料解説のときに、聴講者から「ここの部分がさわっていてわからなかった」という感想が出て、対話が生まれました。普通であれば説明を聞いても「へぇ」で終わるところを、実際にさわって考えることで、主体的に資料に興味をもてるのだろうと思います。主体的に資料に接するきっかけとして、さわることは必要だと思いました。

❹ 今回、後天性の視覚障がい者とご一緒したことで、気づくことが多くありました。「葉」を見ないでさわる体験でも、解説されながらさわる体験でも、見えていた頃の経験から、植物の種類や史料の名称を簡単に当てていました。さわり方、そこからの推測の仕方が興味深かったです。「葉」であれば、「葉の表裏は葉脈の形状からこうではないか」、「アイロン、火熨斗」であれば、「この凸凹や穴が・・・」という風にさわって分かる情報から、推測していく様子が非常に印象的でした。「凸凹やツルツル」といった観点から、用途を推測していく様子は推理ドラマを見ているように鮮やかな流れでした。
「さわる」という触覚の偉大さに気づいた場面でした。

❺ 見ないでさわる体験から、見てさわるよりも、日頃気づかないような点に気づくことができたことや、さわって感じたことが実際とはやや異なっていた部分もあったことなど、いつも見ている資料に対する印象が変わるということを学びました。また、感覚というのは人によって違うこと、同じ素材でもそれぞれに個性があること、ただ目で見るだけは見落としてしまうことがあるということを、対話しながら感じました。

質問3
今回の研修会について、参加して良かったなあ、今後自分の館でこんなことができそうかなあと思う点があればお書きください。

❶ 広瀬さんのお話ももちろんですが、視覚障がい者の皆さんの博物館に対する率直なご意見などが聞けたのは、とても貴重な経験でした。例えば、盲導犬を連れて入るのは、前例がないとのことで入館するのに一苦労したという話がありました。展示を楽しんでもらうためには、来館者が快適に過ごせる空間を作ることも大切だと思うので、自分たちの館だったらどうやれば作れるかを、これから考えていきたいと思います。

❷ 今回の研修をとおして、実際にさわる・体験する・多感覚で資料に向き合う展示をつくっていきたいと思いました。まずは、自分自身が様々な資料をさわって、魅力を理解することから始めなければいけません。資料と向き合う時間をつくることが必要だと思います。そのうえで、誰でも来て、なにかひとつは楽しめるというユニバーサルな空間をつくりたいと思いました。

❸ コロナ渦の現在、多くの人が「さわる」ということに消極的で、いけない事であるかのように排除されているのを感じています。しかし、視覚に障がいがある人たちは、さわりながら生活しています。アテンドをしてもらう際も、腕をつかむなど他者と触れ合うことがあります。広瀬先生の「それでも僕たちは濃厚接触をつづける！」という力強い言葉は、感染しないようさせないようにと、正しいと思って行動していることが、本当に正しいかとハッとさせられました。見える自分たちのことしか考えていないのではと。ユニバーサルな視点を持つことの大切さを感じました。

❹ 今回の研修に参加させていただいて思ったことは、「視覚障がい者との直接的な触れ合いの場が持て、その上で貴重な意見を聞けたのが良かった」ということです。
特に、盲導犬の誘導のスピードは私自身が思うより2倍は速く進んでいたこと。また同行支援者も同様に誘導のスピードが速かったのには驚きました。その誘導（歩く速さ）というのは互いの信頼関係あってのものだということを痛感しました。

❺ 公共の施設で、盲導犬をつれて行くことと入場を断られたという話は、とても衝撃的でした。前例がないにしても、しっかりと対応できる連携づくりが館には必要だと思いました。また、子ども達が見学に来た際、展示作品の説明文を書き写しているだけだったりするので、事前に学校の先生と話をし、民具など同じ収蔵品があるものについては見て触れて、自分の感想を書けるようにできたらいいなと思いました。

❻ 少しでも触れることができる資料を展示したいと思いました。実際に触れることで資料の特性が分かり、また、丁寧に扱わないといけないという認識を持ってもらうことにも繋がると思います。これは障がいの有無に関わらず大切なことだと思いました。

6-2

見ながらさわる

見ないでさわる2

「音楽療法in宮崎」 ③

■ 講 師
井上 幸一（福岡女子短期大学音楽科准教授）
専門分野：音楽学/音楽療法

■ 講師から一言
音楽療法は、フレイル予防やストレスケアを含む心身機能の維持・改善などを目的として、高齢者をはじめ幅広い対象に実践されています。展示資料によるイメージを基に、身近にあるモノを活用した音探しを行い、その響きを共有する「博物館浴」としてのミュージッキングを体験していただきたいと考えています。

■ 開催日時
2022年8月8日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所
都城歴史資料館（宮崎県都城市都島町803）

■ 内 容
◉ 午前
09:30受付開始、10:00開会挨拶、見学前の心理・生理測定、10:20展示室を個人で鑑賞、10:50鑑賞後の心理・生理測定、11:10休憩、11:20講師紹介、参加者自己紹介、11:30講義「《音楽療法とは》《音楽行動と社会》《活動内容及び楽器の奏法など》」、12:20昼食
◉ 午後
13:00体験活動1：❶資料のイメージをどう表現するのか話し合う❷使用する音階（音、楽器）、構成、演奏する場所（空間、配置）、楽器作り❸試演と準備❹発表、14:10休憩、14:20ギャラリートーク、14:40体験活動2：❶資料のイメージをどう表現するのか話し合う❷使用する音階（音、楽器）、構成、演奏する場所（空間、配置）、楽器作り❸試演と準備❹発表、15:20休憩、15:30質疑応答、16:15休憩、16:25ふりかえり、17:00終了、解散

■ 受講者数
12名（宮崎9名、福岡3名）

■ 事後アンケート

質問1
井上先生の講義で、印象に残っていること、興味深かったことをお書きください。

❶「博物館浴」という単語自体は、聞いたことや文章上で見たことはありましたが、その定義や実際の活動内容については詳しく知りませんでした。基本的には高齢者や病院や施設入所者へ、展示案内や展示観覧による「よりよい人生の過ごし方」、「リラクゼーションやストレスの緩和」としての一つの方法として、私の中では捉えていました。しかし、今回の井上先生の講義を通して「高齢者を支える人材や若年層」も対象にプログラム等を考案・実践をしていること、ミュージッキングという手法があることを知りました。

❷とても興味深かったことは、音楽演奏は認知症1次予防効果があるということです。また、2次、3次予防効果においても期待ができることは、とても興味深いことだなと思いました。音楽の要素を取り入れた博物館の新たな可能性を感じました。さらに、芸術活動は社会的なつながりと関連があり、博物館に行くことも社会的なつながりを持てるということは、今まで考えたことがなく、なるほどと思いました。

❸社会的なつながりや、社会的なウェルビーイングなど、「社会」という言葉をよく用いていることが印象に残りました。博物館では鑑賞などで個人的な時間を楽しむことも多いですが、公共施設として社会の人々の交流を促すような、参加型のイベントも充実させることが求められていることが分かりました。

質問2
歴史資料館で行なった、音をイメージした作品鑑賞、音探しの楽器づくり、仲間たちとの演奏、さらにギャラリートークでの気づきなどについて、感想をお書きください。

講義風景（井上先生）

楽器づくり

❶楽器演奏を前提に展示を見たことがなかったため、キャプションの情報からより想像を膨らませて作品鑑賞をするという行為が非常に新鮮でした。
ギャラリートークのない段階で鑑賞した場合も、作品の深い理解をしようとする行為を行っていることに気づきました。その後、そこでどのような音を作ろうかとも考えることから、これまでに経験したことのない鑑賞の仕方を体験していることを、身をもって感じられました。ギャラリートークを聞く際も、さらにイメージが膨らむような意識をもって聞き入ることができ、音楽を意識すると、こんなに受けとめる姿勢に違いが生じるものなのかと驚きました。

❷モノから音をイメージしようとすることが、展示されている資料がどのように使われていたかを想像することへ繋がりました。昔の人の暮らしが身近に感じられたことがとても面白く、今後自分が博物館へ行った際にも、ぜひ音を想像してみようと思いました。また、解説パネルを読んだときには、注意が向かなかった事項も、人に話してもらえると興味深く感じることがあり、ギャラリートークとセットでプログラムを実践することで、資料の見方がさらに深まりました。

質問3
仲間とともに語り合ったことで、印象に残ることをお書きください。

❶班のメンバーの発言の一つで、「多様性の時代といわれている中で、音楽表現という正解をおしつけない解説の仕方が興味深く思う」との意見が印象に残っています。
社会のあり方が変化していくにつれて、従来の展示方法・解説方法とは異なったアプローチを開拓していく必要があると感じさせられました。

❷歴史系の博物館の方が、解説を重視していることが分かり、美術館との違いに気づくきっかけになりました。美術館では自由な鑑賞を阻害しないよう、解説を控えめにすることもあるため、ワークショップでも人の意見をどう引き出していくかを気にします。歴史系の方たちは、ワークショップからどう知識を伝えることへつなげるかを、真剣に考えているのが伝わりました。別の施設の学芸員と話すことで視野が広がり、自分たちの新たな学びもみえるように思ったため、今後も交流の機会を大切にしたいです。

質問4
今回学んだことを、今後の学芸員活動でどのように活かしていきたいですか？

❶音楽を用いると、能動的な鑑賞がしやすいことがわかった。鑑賞が苦手な人も展示にアクセスしやすい方法なのではないかと感じ、音楽は新しい鑑賞方法として取り入れていくべきだと思った。

❷今回は音楽療法という、音楽を演奏することによって、リフレッシュやリラックス効果を得る方法でした。特にグループワークは、子どもから大人まで幅広く楽しめる内容で、博物館とミュージッキングによる癒し効果が期待でき、体験学習などに取り入れやすそうだと感じました。また、展示物などに興味を持たせ、他の人の考えを共有でき、展示内容を理解する助けにもなると思いました。

❸視覚情報だけでなく、五感を使って想像することがとても面白いと思ったので、せひ今後の鑑賞会にも取り入れていきたいと思いました。楽器をつくる時間がない場合も、どのような音がしそうか聞くことで、とても生き生きとした鑑賞体験になり、印象に残るのではないかと思いました。感想を付箋で貼ってもらうなど、博物館での交流に参加してもらう様々なヒントを得たので、少しずつでも実践していきます。

練習風景

発表風景

「音楽療法in沖縄」 ④

■ 講 師
井上 幸一（福岡女子短期大学音楽科准教授）
専門分野：音楽学/音楽療法

■ 講師から一言
前掲のとおり

■ 開催日時
2022年8月22日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所
本部町立博物館（沖縄県国頭郡本部町大浜874-1）

■ 内 容
◉ 午前
09:30受付開始、10:00開会挨拶、見学前の心理・生理測定、10:20展示室を個人で鑑賞、10:50見学後の心理・生理測定、11:10休憩、11:20講師紹介、参加者自己紹介、11:30講義「《音楽療法とは》《音楽行動と社会》《活動内容及び楽器の奏法など》」、12:20昼食

◉ 午後
13:00体験活動1：❶資料のイメージをどう表現するのか話し合う ❷使用する音階（音、楽器）、構成、演奏する場所（空間、配置）、楽器作り ❸試演と準備 ❹発表、14:10休憩、14:20ギャラリートーク、14:40体験活動2：❶資料のイメージをどう表現するのか話し合う ❷使用する音階（音、楽器）、構成、演奏する場所（空間、配置）、楽器作り ❸試演と準備 ❹発表、15:20休憩、15:30質疑応答、16:15休憩、16:25ふりかえり、17:00終了、解散

■ 受講者数
21名（沖縄19名、福岡2名）

■ 事後アンケート

質問1
井上先生の講義で、印象に残っていること、興味深かったことをお書きください。

❶ グループでしました質問（音楽療法で先生が印象に残った案件とは？）の回答（豆腐屋さんのラッパの音を聞き、普段は寡黙な方が饒舌に喋るようになった事や童謡『赤とんぼ』を聞いた方が涙した事）が、音楽療法の効果が直接実感できる具体的案件で感動しました。

❷ 音楽療法の効果で、身近で、本人が関心を持ちやすい題材ほど効果が高いというのが印象的でした。私の行う自然の展示や講座でも、沖縄市の市街地や公園でみられるような身近なものばかりテーマにしてきました。漠然と、受講者が自らの体験と結びつけてフィードバックできるような内容でないと、生きた学習にならないのではという意識があったのですが、博物館福祉の観点からみても同様というのに、すごく納得のいく部分でした。

❸ ミュージッキングが能動的な音楽活動の効果として、実際に健康増進・疾病予防につながることを検証する研究が進められており、その効果が論文など目に見える形になってきていることを知れたことは大変印象深かったです。

❹ 仏像の姿勢を真似したり、展示を音でイメージしたりする事によって、展示物を見る、説明を読むという受動的活動から、能動的活動になる。そのことで認知症予防などにも効果があるという事が興味深かった。

作品鑑賞風景

発表風景

質問2
博物館で行なった、音をイメージした作品鑑賞、音探しの楽器づくり、仲間たちとの演奏、さらに各班の工夫などを聞いての気づきについて、感想をお書きください。

❶ 実際に音探しをしている最中には、個々の展示物に近い音を、個々の楽器から探してみることに専念していました。しかし、他の班では一つの展示物の音（動作を含む）を表現するために、複数の楽器を用いて表現する例がありました。
また、実際の音とは多少違えども、楽器を扱う動作で表現（オノマトペにも通ずる様な）の例もあり、各人やグループから生じる表現の多様さを楽しめました。
音をイメージした作品鑑賞には、意識するだけでモノについて向き合う時間が延長され、音というほぼ誰もが想像できる要素は、広い入口となると感じました。そしてモノの発する音は、その存在する環境などの背景と密接に繋がるという点も理解でき、それを味わうこともできました。

❷ 班の演奏がとくに印象的でした。海水中で原初生命が誕生していく様子から、生物の上陸、多様化までを抽象的な音で表現しており、一種の芸術を鑑賞しているようでした。自班もふくめ、他の班が道具の出す実際の音に注目していたのに対して、より抽象的で現実にはない音でありながら、「ああ、これでいいんだ。」と思わされました。
どうしても、資料を前にすると、そのモノがもつ"うんちく"を語ってしまいそうになりますが、それを取り払った鑑賞という意味が分かったような気がします。

質問3
仲間とともに語り合ったことで、印象に残ることをお書きください。

❶ 今回のような抽象的な活動は、すごく苦手だな、というのを感じました。正解があるような気がしてしまうものに対して、自由に想像するということを体験して来ていないのだと思います。今回と同じ内容を、今の小学生が授業の中でできるだろうか？あるいは学校の先生ができるであろうか？と考えると疑問があります。そういった部分が学校教育の苦手とする部分であるならば、そこにも博物館が果たすべき役割があるのだと認識しました。

❷ お互い違う思考をしているので、それを提案し合うことで何倍も深まったり、発想が広がったりすることを久々に感じました。

❸ 最初はまったくイメージ出来ず、どのテーマにするかで迷った。それぞれの専門のテーマだとモノについて「説明」しそうになるという意見があり、あえて専門ではない場所を選んだ。確かにその通りで、専門のテーマだと説明過多になって、展示を音でイメージする事の意義が損なわれてしまうと感じた。また、迷っていた私達を見かねて緒方先生から「イメージなので、あまり頭で考えすぎない方がいいよ。直観が大事！」と声をかけて頂いたが、実際に音を探していく中でとても腑に落ちた言葉だった。音を探すことはとても直観的な作業だった。

質問4
今回学んだことを、今後の学芸員活動でどのように活かしていきたいですか？

❶ 五感を使って伝える、感じとってもらう、ということは、展示や教育普及プログラムの中でも意識したいと常々思っています。しかし、思っていた以上に「音」を意識していなかったことに気づかされたので、「音」を意識したことを何か取り入れられないかと考えています。

❷ 展示の内容を深く理解してもらうことが博物館教育の深まりのように感じていましたが、必ずしもそうとも限らないと頭が切り替わりました。学校へのアプローチの仕方や、博物館での連続講座の1部に、音楽療法のようなもののバックグラウンドにとらわれない手法を取り入れてみたいと思います。

❸ 展示資料とお客さんとの距離（モノをさわれない、特に年少者は使用法がわからない）を縮める方法として、音楽療法を取り入れていけそうな感じがするので、当館なりにフィットさせていきたい。

作品イメージの発表（オンライン）

講評（オンライン）

「園芸療法in熊本」 ⑤

■ 講 師
岩崎 寛（千葉大学大学院園芸学研究科准教授）
専門分野：環境健康学

■ 講師から一言
園芸療法とは、植物の栽培といった一般的な園芸活動だけでなく、植物を用いたクラフトや庭園の散歩など、身近な植物を五感で感じることで、ストレス緩和や、落ち込み・不安などの感情を改善するものです。本講座では、園芸療法の事例を紹介しながら、その効果や身近な実践方法についてお話します。

■ 開催日時
2022年8月11日(木)10:00~17:00（9:30~受付開始）

■ 開催場所
熊本市現代美術館（熊本県熊本市中央区上通町2-3）

■ 内 容
◉ 午前
09:30受付開始、10:00開会挨拶・散策前の心理/生理測定、10:20講師紹介、10:25園芸療法プログラム1「岩崎先生の解説を聞きながら街なかを散策しよう」、11:05休憩、11:15散策後の心理・生理測定、11:25参加者自己紹介、11:35講義「植物のセラピー効果を地域ケアに活かす」❶、12:10昼食
◉ 午後
13:00講義「植物のセラピー効果を地域ケアに活かす」❷、14:00休憩、14:10講義「植物のセラピー効果を地域ケアに活かす」❸、15:05休憩、15:15園芸療法プログラム2「色々な豆を使った豆チャームづくり」、16:05休憩、16:15質疑応答、16:35ふりかえり、16:50講評、17:00終了、解散

■ 受講者数
15名（熊本7名、福岡4名、大分2名、千葉1名、東京1名）

■ 事後アンケート

質問1
岩崎先生の講義を聞いて、印象に残っている事、興味深かった事をお書きください。

❶ 美術館として、園芸療法を単体で取り入れることが有効かどうかは正直判りません。むしろ、行政が園芸の市民の（特に心の）健康に対する効果を理解し、意識し、見える化することができれば、行政の施策の中で、造園職の業務の重要度や利用のされ方が変わるような気がしました。
そして、それは当館が今やろうとしている、アートで社会課題を解決するということと似ているような気がします。
園芸とアートは機能的にすごく近いのかもしれません。園芸もアートも手と頭を使いますよね。
園芸をアート、或いは、公園を美術館と置き換えると、園芸療法士＝文化芸術リンクワーカーだな、と思いました。
園芸効果のエビデンスは、自分自身が感じているので体感として理解しやすかったのですが、アートもこのエビデンスがすごく大事だなと改めて感じました。
それがあると、行政を動かすこともできそうな気がします。

❷ 講義の中で「健康」という言葉の定義を明確にされたことは、今回の講座を理解する上で大変助かった。また、医療や看護学の分野の評価手法を導入しながら、「緑」の効用を評価するということの幅広さを感じた。ゼロ次予防の考え方を環境整備に取り入れるという考え方は、積極的な緑の活用につながる考え方だと感じた。緑の活用の場として公園緑地以外の博物館・美術館等の公共空間を強く意識することができた。

❸ 私が1番印象に残ったお話は、植物や園芸療法を職場に取り入れた影響についてのお話です。出前園芸によるメンタルケアの有効性について興味深いと感じました。また、緩和ケア病棟の看護師への出前療法をする事で、間接的に患者さんに繋げることができるのはいいなと思いました。

❹ 園芸療法は様々な効果があることは、一般に認識されていると思うが、エビデンスをしっかり示されると、受け止め方がまったく違うことを再認識できた。ゼロ次予防や花園公園レイズドベット、間接的園芸療法が非常に興味深かったです。

❺ 私は今回の講義の中で、「園芸療法は病気を治癒するものではなく、体調をもとの状態 (健康な状態)に戻す」ということがキーワードのように感じました。それは、健康と病気の間に位置する「未病」の状態にある人のストレスを緩和し、健康状態のバランスを取るようなことだと理解しました。そんな健康状態を安定させるという緑を、5分間座観して休憩した後の血圧や脈拍のデータにおいて、座観する前に比べ高血圧・低血圧の人はその数値が正常な値に近づいているということに大変驚きました。

質問2
ワークショップ「豆チャームづくり」を通して、気づいた事をお書きください。

❶ 楽しかった～！です。豆もひとつとして同じものがなくて、見るだけで楽しかったです。
園芸療法の良いところは、「ひとつくらい、土に埋めてみようかな？」と思わせられるところですね。そして、そこからもしも芽が出て来たら・・・ものすごくテンションが上がります。

❷ 作業後に不思議と、気持ちが楽になったように思う。豆の触感や香り、岩崎先生の豆知識、自分のイメージを具現化するという行為、何かを完成させるという行為、成果（豆チャーム）を他者と話して共有する行為など、ワークショップを通じて、気持ちを変化させた要素がいくつかあると思うが、これをどこまで企画立案のなかで意図して取り入れたのか非常に興味深かった。

❸ 豆チャーム作りを通じて、植物を使って作業する楽しさを感じました。豆や綿、苔の触感や見た目、匂いから自然を感じることができました。また、自分が作った作品やその世界観を通じて、会話が弾むのも楽しかったです。

❹ 絵を描くとなると、上手に描かなければとか、違うストレスが掛かるが、簡単で誰でもできるのがよい。想像以上に集中できて、それが心地よい集中だった。豆の肌触りも心地よく感じた。

❺ 私はこのワークショップについて、「作って楽しい」だけで終わらないために、岩崎先生がどのような声かけをするのかについて気になっていました。その中で、今回は様々な種類の豆を組み合わせた「豆チャーム」をつくるということで、豆の色についてのお話がとても興味深かったです。例えばとら豆やシャチ豆、パンダ豆は、その色によって名前が付けられていたことに面白さを感じました。
私がこのワークショップで面白さを感じたポイントは、色の組み合わせや豆の柄に個性があることを見つけたこともありましたが、微妙に違う肌触りもその一つでした。オノマトペで表現すると、ツルツルだけどスベスベなものと、ツルツルだけどキュキュッとするような若干の違いがありました。

質問3
岩崎先生と一緒に、街中を散策した時に、先生のお話から気づいたこと、今までと違った散策体験などをお書きください。

❶ そもそも日本は都市計画で街並みを揃えることもなかなかできていないですが、せめて公共や半公共の施設を作るときに、その建物の敷地内だけでなく、周囲の風景（周囲の建物の敷地内の緑）との融合みたいなことが考えられると、良い街並みになるのだろうなぁと思いました。

❷ 動線と人の心理に配慮された植栽であるかという視点が興味深かった。一番、印象に残ったのは喫煙所の緑化である。喫煙所のイメージ向上のために、設置者の立場でいえば「隠す」ためであるだろう環境美化が、喫煙者の心地よい空間づくりに寄与し本末転倒ではという視点が面白かった。今後、きれいな喫煙所を見るたびに観察してしまうような気がする。

❸ 街を歩くことで、何気なく見ていた街路樹がどのような役割を担っているか分かりました。カフェの中庭が何となく居心地が良く感じましたが、その要因を解析することで、水や木漏れ日の役割があることがわかりました。今まで心地いいと感じていた場所には、確かに植物や水場があると再発見できました。

❹ 福岡市では「一人一花運動」を展開中だが、街中の花壇の中には枯れているものもある。また、駐車場出入口や空きスペースへの植樹についても、本市の公共施設にも該当するものがありそうだった。
先生のご指摘のとおり、花壇のなかで1つでも枯れているものがあれば人は目を背けるし、空いたスペースに緑を植えるのでは、緑のもつ効用を引き出すことはできない。

講義風景（岩崎先生）

まち歩き1

公共施設としては、「植えればよい」ではなくて、どのような種類の花や緑をどこに配置するのかということにも留意するべきであることを学んだ。

質問4
今回学んだことを、今後の学芸員活動でどのように活かしていきたいですか？

❶園芸療法そのものというよりも、考え方をアートに置き換えてもう一度きちんと考えてみたいと思います。園芸療法は、市役所の中で造園力アップのきっかけづくりができるとおもしろそうなので、誰に仕掛ければ動くのか考えてみます。

❷行政が管理する「緑地」や「植栽」は、「触ること」を前提に考えていません。むしろ、どのようにして「触られないようにする」かということを考えていたように思います。
今回の講義を聞いて、植栽帯は、触られて荒らされるよりも、人が興味を持たなくなった時の方がよほど荒れていることが多いことに気づきました。
公共地の植栽帯の管理は、もはや税金だけでは賄えなくなってきており、これから「公園」や「公共の場」の「緑」の在り方が変わっていくと感じています。多くの人が楽しめる「緑」を作っていけるよう、施策の検討に活かしたいです。

❸受講者が所属する福岡市博物館にも前庭がある。博物館が、地域社会の中の「公共施設」としての役割も果たし、地域社会の中で存在価値を発揮していくために、前庭に大きな可能性があることを認識できた。前庭の緑を通じて、広く市民の交流が生まれれば、これまで関心のなかった層の来館や庭の緑を通じた再来館につながるかもしれない。

❹「美観の花壇」という考えをやめて、ハーブなどを植えて「収穫する花壇」を目指してみたいです。まずは職員内から始めてみたいです。そこから徐々に、来館者も利用できる花壇に変えていけたらと思います。

6-5

まち歩き2

豆チャームづくり

豆チャーム鑑賞

ふりかえり

「園芸療法in長崎」 ⑥

■ 講 師
岩崎 寛（千葉大学大学院園芸学研究科准教授）
専門分野：環境健康学

■ 講師から一言
前掲のとおり

■ 開催日時
2022年8月29日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所
長崎県美術館（長崎県長崎市出島町2-1）

■ 内 容
◉ 午前
09:30受付開始、10:00開会挨拶・散策前の心理/生理測定、10:20講師紹介、10:25園芸療法プログラム1「岩崎先生の解説を聞きながら海辺の公園を散策しよう」、11:05休憩、11:15散策後の心理・生理測定、11:25参加者自己紹介、11:35講義「植物のセラピー効果を地域ケアに活かす」❶、12:10昼食
◉ 午後
13:00講義「植物のセラピー効果を地域ケアに活かす」❷、14:00休憩、14:10講義「植物のセラピー効果を地域ケアに活かす」❸、15:05休憩、15:15園芸療法プログラム2「色々な豆を使った豆チャームづくり」、16:05休憩、16:15質疑応答、16:35ふりかえり、16:50講評、17:00終了、解散

■ 受講者数
12名（長崎8名、福岡3名、千葉1名）

■ 事後アンケート

質問1
岩崎先生の講義を聞いて、印象に残っている事、興味深かった事をお書きください。

❶緑地や植物が人間の生活にとって癒し効果（ストレス軽減）になることは何となく知っていたものの、その効果をきちんと検証結果としてとられているので説得力がありました。人間のメカニズムのどの部分にヒットするのか、園芸療法が具体的にどのように活用され効果を得られているのか、先生の講義がとてもわかりやすく理解できました。

❷受講前から「緑（植物）」を観察すると何となく落ち着くというイメージはありました。今回の研修会の中で、バイオフィリア理論『人は自然を好む性質を先天的に持っている』という事を聞き、意図せずに、緑を受け入れる性質が人間の本能としてあるという事が印象に残りました。

❸講座に参加するまでは、「園芸」と聞くと定年後の楽しみのイメージで、また我が家は母が生け花をしていたこともあり、常に部屋や庭には草木がある生活をしていたので、私にはまだ関係ないと思っていました。育てることに将来の楽しみ・期待・継続意欲を持ち、収穫することで満足感・充実感・幸福感を得られるという様々な園芸療法の実績をお聞きして大変驚きました。ただ土に触れて農作物を育てるのではなく、その人に合った育て方を工夫することにより、育てることの喜びや収穫することの満足感を確実に得られそうで、勉強になりました。
体調が悪くなってから病院に行くのではなく、体調が悪くならないように簡単に予防が出来るのならば、実践してみようと思います。

海辺の公園散策

豆チャーム鑑賞

6-6

質問2
ワークショップ「豆チャームづくり」を通して、気づいた事をお書きください。

❶ こんなに豆の種類が豊富で調理する前の豆をこれほどじっくり見たり、さわったりしたことがなかったので、未知の体験にわくわくしました。視覚情報にプラスして手ざわりやにおいからくる情報を体が取り込むことでより豆そのものや制作したものへ愛着が湧くのかもしれないと思いました。
また、あの小さなビンの中に自分だけの世界観を作るということがとても楽しかったです。重ね方や模様の見え方、色味の組み合わせなど一種の造形活動のようでした。また指先に神経を集中させるので、特別支援の子どもたちへの指先運動としても効果的かもなど考えながらつくりました。

❷ 最初にいろいろな種類の豆をみて、豆にもさまざまな模様があることを初めて意識しました。私は豆の名前が気に入り、瓶の中に小さな食物連鎖を作りました。作る時に豆の向きを気にしたり、どのような順番にするかなど楽しみながら作成することで、小さな動き、考える力などを無意識のうちに行える素晴らしいリハビリプログラムだと思いました。

❸ 豆の見た目だけでなく、味も豆選びのポイントになってくるところが面白かったです。美術のワークショップは見た目によるところが大きいので、文字通り五感を使って楽しめ、かつ育てれば食べられる、というその後の展開まで選択肢を用意できるのはとてもよいと思いました。

質問3
岩崎先生と一緒に館周辺を散策した時に、先生のお話から気づいたこと、今までと違った散策体験などをお書きください。

❶ 水辺の森公園から散策の延長に美術館があるということが、当館の立地の特徴です。しかし、私自身は水辺の森公園の利用をあまりしたことがなかったので、新鮮な活動でした。また木々や植栽を見ながら歩き、光合成の良し悪しから植物の状態を目の当たりにして、樹木が『生きもの』であることを再認識しました。
公園をデザインするのにも利用者の視点、景観デザインの視点、植物の生態の視点など多種多様な視点が相まって設計されているのだということにも気づかされました。

❷ 散策の前は、水と緑に囲まれた素敵な美術館という印象でした。散策する中で、普段なら目線の範囲でしか樹木に注目をしないが、樹木の高い位置に注目すると枯れている枝、幹から枝が伸びている、子孫を残すために過剰に実をつけているなど、樹木本来の姿でない事に気付かされた。緑に癒し効果があることでの植栽なのだろうが、樹木本来の姿であれば、よりヒーリング効果があるのだろうと感じた。

❸ 何気なく、緑や木陰が気持ちよい、という感覚はもっていましたが、水辺の森公園を構造でみるよい機会になりました。植物の種類や植えられている場所の関係のお話が大変興味深かったです。「うまくいっていない」植物の現状も含めて、身の回りの緑をよく観察してみようと思います。

質問4
今回学んだことを、今後の学芸員活動でどのように活かしていきたいですか？

❶ 博物館浴とか公園浴といった自然治癒力を高める効果が認められている昨今、美術館でも同様に作品を介したコミュケーションの創出やサードプレイス的な役割を持てる空間において、何かプログラム提供ができればいいと思いました。

❷ 水族館では水の動き、水の塊（水塊）などを展示方法により工夫することでお客様に非日常の癒しを感じて頂けるようにしています。水族館の周りにも緑が多数あるので、水の癒しとともに緑での癒しも追加できるような工夫をして、来館していただいた方々に無意識のうちに、心身のリフレッシュをしながら楽しんでいただける展示が出来るようにしていければと思いました。

❸ 美術館の中だけでなく、外の環境にも目を向け、来館者やスタッフともにストレスを軽減できるよう、よく観察して考えていきたいです。

❹ 美術館で行っている、学校団体を対象とした館内ツアーの中で、自分なりにアレンジし取り入れることができればと考えています。

❺ 高齢者施設のお出かけが再開された際に、弊館の見学と合わせて隣接する公園の利用を提案し、高齢者の健康づくりをサポートしたいと考えます。
また、今後、植物を取り入れた回想法についても方法を検討し、回想法支援のプログラムの充実を図っていきたいです。

❻ 当館の近隣に介護者の集いの場があるため、今回の学びをもとに、気軽に体験してもらえる場を継続的に提供していけないか、館と福祉課と話し合い、提案しようと思いました。

6-6

「やさしい日本語 in 佐賀」 ⑦

■ 講 師
村田 陽次（東京都生活文化局都民生活部地域活動推進課）
専門分野：共助・共生社会づくり
髙尾 戸美（多摩六都科学館）
専門分野：博物館学

■ 講師から一言
近年注目を集めている「やさしい日本語」は、外国人にもわかるように配慮して簡単にした日本語のことですが、実は高齢者や子供、障がい者等とのコミュニケーションにも有効な考え方です。私たちは「やさしい日本語」を使って、美術館などの文化施設を全ての人々に対して開かれた場にしていきたいと考えています。（村田 陽次）

ミュージアムにとって、やさしい日本語を導入する意味とはどのようなことでしょうか？また館内外において、それらはどう受け止められ、どのように展開すれば良いのでしょうか？当館の事例から皆さんの現場での取り入れ方をイメージし、在住外国人の方にやさしいミュージアムの第一歩を歩み出したくなる場にできればと思います。（髙尾 戸美）

■ 開催日時
2022年9月5日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所
佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
（佐賀県佐賀市城内1-15-23）

■ 内 容
◉ 午前
09:30受付開始、10:00開会挨拶、講師紹介、参加者自己紹介、10:20講義「多文化共生とやさしい日本語」（村田 陽次）、11:30休憩、11:35質疑応答❶、11:50昼食
◉ 午後
12:35事例紹介「多摩六都科学館の取り組み」（髙尾戸美）、13:35休憩、13:45質疑応答、14:20展示室見学前の説明（秋山学芸員）、14:40展示室見学、15:10休憩、15:20ワークショップ「博物館のワークシートをやさしい日本語で作成してみよう」ファシリテーター：緒方泉（九州産業大学地域共創学部）、15:50発表・講師による講評、16:20ふりかえり、17:00終了、解散

■ 受講者数
30名（福岡13名、佐賀5名、長崎5名、宮崎1名、山口2名、沖縄1名、東京3名）

■ 事後アンケート

質問1
今回の研修会で、村田先生の講義から学んだことは何ですか？

❶ 在住外国人の約6割が、広報物を読む際に日本語（もしくはやさしい日本語）を希望しているということです。私はこの研修を受けるまで、外国の方に声をかけられると、英語で対応したほうが相手にとっても分かりやすいのではないかと思っていました。仮に相手が日本語で話しかけてくれたとしても、「日本語で対応して分かってもらえるだろうか、どんな日本語を使えば理解してもらえるだろうか」という気持ちが大きく、焦ってしまうこともよくありました。
しかし、少なくとも日本に住んでいる外国の方にとっては、むしろ日本語のほうが分かりやすい可能性が高いと知り、今後は日本語での対応に自信を持てそうです。そして、やさしい日本語で伝えるためのポイントも知ることができ、同じ日本語での案内や説明でも、相手の反応を感じながら言葉を選べそうだと思いました。

❷「やさしい日本語」については、基本的な知識がなかったので、概要が大変よく分かりました。様々な立場の人とのコミュニケーションをとっていくためには、多言語対応だけでなく、いろいろなツールを活用していくことが大切であると思いました。特に、「やさしくするためのツール」は、ぜひ活用させていただきたいと思います。また、学校教育との親和性も高いのではないかと感じましたので、教育現場との連携もできたらいいのではないかと思いました。

❸ やさしい日本語が求められている背景を伺い、ポイントをおさえ、より伝わる言いかえや書き換えをする事が大切だと感じました。これまでは、掲示物やチラシ等、目で見る文章に用いる表現法とばかり思っていましたが、話し言葉としても活用すべき表現方法であることを改めて学ぶことができました。

6-7

講義風景（村田先生）

グループ討論1

❹ 1つの翻訳で、1つの言語圏の方にしか対応できない多言語化と異なり、「やさしい日本語」はそれ一つで様々な外国の方だけでなく、子どもやハンディキャップのある人など、あらゆるケースに対応できる方法論であることが目から鱗でした。長かったり、複雑だったりする文章を分割して、簡潔にまとめ直す「分かち書き」という方法や、やさしい日本語の度合いを測る基準がきちんと整備されていることを学びました。

❺ やさしい日本語の概要的な部分は、知識のなかった自分にも、ある程度想像できていましたが、国内在住外国人の割合などのデータを見せていただいて、自分の考えていた以上に需要があると知り、自分の認識と差があると勉強になりました。

❻「やさしい日本語」とはいったい何かを、まず学びました。また、その「やさしい日本語」の組み立て方や、「やさにちチェッカー」・「Reading　Tutor」というコンテンツの利用の仕方等、実践的な方法も学ぶことができました。

質問2
今回の研修会で、髙尾先生の講義から学んだことは何ですか？

❶「博物館の現場と在住外国人のニーズの乖離…」は、まさにその通りといった感じでした。在住外国人のことをまず知ることや、館内で「やさしい日本語」の重要性を認識すること（ここが一番の課題かもしれません）が大事だと思いました。

❷ 2点あります。1点目は、キャプションや解説文に、一定の専門用語を使っても問題ないということです。専門用語は「そういうもの」として覚えてもらうほうが、外国の方にとって学びになるとの見解も聞き、そこは堂々としていいのだと思いました。また、専門用語を使うにしても、カッコ書きで平易な説明をする、実演や実体験を通して理解してもらう、といった選択肢を知ることができたのは大きな収穫です。
2点目は、日本の博物館や美術館は、私の想像以上に、外国の方に受け入れられているということです。情報が届きさえすれば、ややアクセスが分かりにくくても、公共交通機関を利用してまで来館してくれるのだと知り、嬉しくなりました。やはり、博物館・美術館は国籍を問わず万人に開かれたものであるし、そうでなければならないのだと感じました。

❸ 多摩六都科学館が地域づくりに貢献するため、多様な学びや交流の場をつくり上げる取り組みをしていること。そして、やさしい日本語スタッフ研修などを行っていることを学びました。

❹ 外国人に対する情報提供は、英語のものがあればかなりの割合をフォローできるのではないかと安易に思っていました。しかし、実際に来日した外国人からすると、「やさしい日本語」の方がよりニーズがあることを知り、考えを改める必要性を気づかされました。そして、このことは職員全員が意識することが大切であり、日頃から「やさしい日本語」を使えるよう、研修や実践を重ねるべきであると痛感しました。

❺ 話す「やさしい日本語」について認識を深めました。研修会冒頭、髙尾先生は、やさ日を用いて自己紹介をされたのを見て、私もさっそく取り入れたいと感じました。また、科学館での取り組みと多文化共生の事例の紹介を聞き、私たちの館の今後の取り組みや地域との連携において、模索してみたいと感じた。

❻ 実際に「やさしい日本語」を取り入れたことで、施設の間口を広くできて、イベントにも外国ルーツの方を呼び込めるようになったということを知りました。自分の館もインバウンドの観光客向けのPRや情報発信には積極的ですが、地域に在住している外国人や留学生のことは考慮に入れていなかったということに気づかされました。
また、「やさしい日本語は、易しく言い換えるけれど、相手を見下したり、尊厳を傷つけたりするものであってはならない」ということ。実際に使う際は、そのように受け取られないよう、発信者の心構えや受け手の立場に立つことも大切だということを知りました。

❼ 研修会を通して学んだ「やさしい日本語」を、今後どのように活かしていけるのか実例を見せていただけてよかったです。これまでは、他者への気遣いの派生の一つだと捉えていました。しかし、地域づくりに貢献する手段にもなり得ると聞き、博物館業というのは社会形成の一部であり、それを実現するのは、私たちの言葉遣いでもあると学ぶことができました。

❽ まず、佐賀県における在住外国人がどのくらいいるのか、これまで知りませんでした。今日のお話を聞いて、来館者の需要に合わせて、館としてどのような展覧会や対応すべきかを考えないといけないと感じました。
また、外国人＝英語対応ではなく、在住外国人来館者に対しては、英語よりもむしろ「やさしい日本語」での対応が分かる方がいらっしゃるというところは、今まで考えに及びませんでした。実践的なお話で、どのように活用していたのかが具体的に分かり、自館におけるプログラムに置き換えて想定しやすく、大変参考になりました。「やさしい日本語」の表記をすることで、在住外国人や小学生にもより理解しやすく、展示を楽しんでもらえるように館でも工夫していきたいです。

質問3
午後のワークショップでは、佐賀県立博物館・美術館の4つの作品解説を「やさしい日本語」で作成しました。
作成してみた感想、班で話し合ったことや講師からのコメントでの気づきをお書きください。

❶ 我々のグループは絵画作品『髪を梳く』を担当しました。「やさしい日本語」の置き換えで最も難しかったのは、モデルが緊張している様子、上気した頬、青系統で着物が統一された涼しげな印象などを、どう説明するかでした。結局、これらの部分の説明は外すことになりましたが、美術作品で作者の意図や内面など観念的な説明をどこまで外すかは悩むところでした。今回は具象画だったので、描かれている風景などを説明できましたが、抽象画の場合はどのように説明すればいいのか想像がつきません。
「やさしい日本語」を全面に押し出した展示では、テーマを統一し、冒頭でしっかり意図を説明するなど、これまで以上に展示の説明責任が問われると感じました。
また、展示見学の時に他グループの人と話しましたが、特に考古の説明では、断定形の解説が少ないです。この壁をどう乗り越えるかは課題になると感じました。

❷ 情報の取捨選択は難しく感じましたが、展示物と地域との関連性（なぜここに展示されているのか）を伝えることも、博物館としては大事だと感じました。

❸ 作成してみた感想は、やさしい日本語を、誰を対象に、どのように活用して、分かりやすく表現していくことの難しさを体感できたことです。とても勉強になったので、今後、実践で活用できるようにしたいです。また班のメンバーとは、お互い初めての出会いでした。仕事や役職などを、ほとんど知らない中でのグループ学習になりました。しかし、初めて会ったような違和感もなく、意見交換をして、一つの作品解説を作成できたことは、大いに参考になりました。人の感性の豊かさや多様性を感じることができ、有意義でした。

❹「カブトガニ」の班でしたが、「化石」や「天然記念物」などの言い換えが困難な単語が多く、難しかったです。班で複数の人と話し合うことで、違った視点を得られてよかったと思いました。

❺ 同じ作品や解説文をもとにしても、班ごとに強調したいポイントや工夫、言い回しに違いが見られたのがとても興味深かったです。実際に運用するうえでは、展示の文脈や流れ、どのような相手に向けて発信するのかを十分に考えながら、言葉選びをしなくてはならないと思いました。「ただの翻訳であってはならない」ということ。単に言葉を平易にするというだけではなく、その裏の文脈や意味付けなども見直しながら表現を練らないといけない。自分の価値観や考え方まで見透かされるような気分で、とても頭を使うことが分かりました。

❻ 班の皆さんと話し合えば話し合うほど、日本語が優しくなっていくのが実感でき楽しかったです。また、自分と他人の"分かりやすい"が異なることを体感しました。この違いをすり合わせることなく進むコミュニケーションは、怖いなと思いました。「やさしい」を実現することの難しさに気づかされました。

6-7

講義風景（髙尾先生）

グループ討論2

質問4
今回の学びを明日からの活動に、どのように活かしていきたいですか。

❶ 今回の研修会では、我々が誰に何を伝えるかを明確にする必要性を改めて感じました。その上で相手が理解できる言葉を使い、適切な資料を提供・提示するという、博物館の根本的な使命が理解できているかを突き付けられたように感じています。

❷ 多文化共生に向けての「やさしい日本語」の必要性は自分なりに理解できたと思います。在住外国人に対してだけでなく、ユニバーサル・ミュージアムに向けての取り組みを進めていくためには、自分の所属する博物館が抱えている課題を明確にし、それに対する対応を考えていかなければなりません。今回の研修会で学んだことを他の職員の方に広めるとともに、展示解説やキャプション、ワークシートなどの一層の改善を進めていけたらと思います。特に、子どもの発達段階に応じたワークシートづくりの参考にさせていただきたいと思います。

❸ 在住外国人は勿論、子ども向けの展示などに応用ができそうだと思いました。加えて、自分の解説の文章がとても小難しいということがよく分かったので（笑）、普段からできるだけ読む人にやさしい平易な文章を書くように意識したいと思いました。

❹ 自分の伝えたいことが相手からどのように受け取られるのか考えながら、文化を発信していきたいと思います。

❺ 相手にあわせて、自分の伝えたいことを「言い換える」というところは、日々の小学生の団体見学対応や、その他の小学生向けの出張講座・プログラムでも苦心していました。今後は、「やさしい日本語」のチェッカー等、ぜひ活用したいと思います。（「やさしい日本語」とは別かもしれませんが、展覧会の案内として紙芝居やしゃべるスピードなど、工夫の余地がまだまだあると実感しました。こちらも是非何か活用したいと思います）

❻ 最後のワークショップで皆さんの発表を、作品を見ながら聞いていると、どの班も解説の言葉によって作品に色を添えられ、より作品の魅力を感じました。日本語を精査すると、本当に純粋に美しいという感動もあり、今まで経験してきたミュージアムトークや、学芸員による作品解説という分野より、俳優による録音の音声ガイドのような、又は、母親が子どもに絵本などを読み聞かせをするような印象を受け、作品を丁寧に読み聞かせてもらっているような心地がいたしました。
このような「やさしい作品読み聞かせ」のコンセプトでミュージアムトーク・作品解説があってもよいなと感じました。

❼「やさしい日本語」とその活用事例や需要について、まず職場の皆さんにも共有して知ってもらう事をしたいです。日常業務に追われ、こういったプラスαの仕事を、しっかり話せる時間が業務中あまりないため、資料館リニューアルの動きが本格化する前に、必ず「やさしい日本語」について、職場で共有できるようにしたいと思います。

6-7

作品説明

作品鑑賞（絵画）

作品鑑賞（自然）

グループワーク

「回想法 in 大分」 8

■ 講 師
市橋 芳則（北名古屋市歴史民俗資料館長）
専門分野：博物館学

■ 講師から一言
回想法は、高齢者を元気にし、世代間交流を促すプロジェクトとして活用されています。博物館と高齢者ケア・認知症予防・健康推進などを推進する福祉関係の部局とが連携を図った「思い出ふれあい（回想法）事業」を2002年から実践しています。私たちは、これを「博福連携」と名付け、地域活動の軸の一つとしています。

■ 開催日時
2022年10月3日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所
駄菓子屋の夢博物館（大分県豊後高田市新町1007-5）

■ 内 容
◉ 午前
09:30 受付開始、10:00 開会挨拶、見学前の心理・生理測定、10:25 講師紹介、参加者自己紹介、10:40 休憩、10:45 展示室見学（個人鑑賞）、11:35 見学後の心理・生理測定、11:55 休憩、12:00 講義❶「回想法と北名古屋市歴史民俗資料館のこれまでの取り組み」、12:40 昼食
◉ 午後
13:30 講義❷「回想法と北名古屋市歴史民俗資料館のこれまでの取り組み」、14:40 休憩、14:45 グループ討議、15:00 展示室へ移動、グループで鑑賞、15:45 休憩、16:00 グループ討議、16:30 ふりかえり、16:50 講評、17:00 終了、解散

■ 受講者数
18名（福岡10名、大分2名、山口2名、長崎2名、愛知1名、東京1名）

■事後アンケート

質問1
市橋先生の講義や「回想法スクール、生き生き隊」の映像で、印象に残っていること、興味深かったことをお書きください。

❶ 回想法スクールは認知症予防を目的として始められたが、効果はそれのみでなく、地域のコミュニケーションの発展、異世代交流、伝統・文化の継承、街づくりまで効果を及ぼしている事に驚いた。

❷ 役割があることで、生き生きとしている姿が印象的でした。リタイヤしてもらうことが労わることではないのだと確信ができ、各々の知識や経験を活かし、次世代につなげていけるような活動を推進していかなければと感じました。
また、「家族は聞いてくれないもんね」という言葉が突き刺さりました。傾聴が大切なことだというのはわかっていても、自分も含め家族間ではなかなか難しいことのように思えます。体育館に高齢者が並んでいるシーンがありましたが、子どもが幼稚園、小学校に通うように、高齢者にも家庭とは別の居場所があることが重要だと思いました。

❸ いきいき隊の活動が、高齢者の活動として終わるのではなく、自主的に継続し、世代間の地域交流に繋がっていることが印象に残った。グループワークのみで終わってしまわないか、不安を感じていたため、継続している事例があることを知れてよかった。

❹「三種の神器に留まらず、当時のゴミ箱を再現出来るくらいに収集する」という市橋先生の言葉が印象に残っていま

自己紹介

講義風景（市橋先生）

6-8

す。自分自身も昭和の暮らしに対して、教科書的なステレオタイプな見方、想像をしてしまっていたのではないかと思います。多様性のある回想法を行うには、こちらもステレオタイプを脱却しなければと感じました。

❺ 高齢者に、昔の記憶を思い返してくださいというと、いかにも年を取ったなと感じさせてしまい、受け手としてはネガティブな印象を受けてしまうのではないかと感じていました。しかし、多くの方と記憶、思い出を共有することで、若い世代に伝えてみようというポジティブな感情になるのだなという事を感じました。

❻ 回想法では、五感を刺激することで、これまで忘れてしまっていたような個々人の様々な記憶を呼び覚ますきっかけとし、それが脳を活性化させ、健康増進や認知症予防につながると知り、たいへん興味深く感じました。映像では回想法を実践する高齢者の表情が明るく、身体的にも活発になっていたように見え、過去の記憶が現在の元気の源となり、これからの活力になっていく様子がとても印象的でした。

質問2
駄菓子屋の夢博物館などでの「個人鑑賞、グループ鑑賞」について、あなたの中で起こった資料との関わりの変化（個人鑑賞とグループ鑑賞の違い、そしてギャラリートークや市橋先生の解説での気づきなど）、また"心が動かされた、アッ！思い出した"という鑑賞体験の感想などをお書きください。

❶ グループで鑑賞すると、自分が気づかなかったところに気づかされておもしろかった。世代によって関心を持つ資料が違うので、それぞれの経験を共有できるのはよかった。

❷ 現在収蔵している資料の展示方法について、人それぞれ様々な思い出等があり、その観点を加える事で、展示方法等の幅が広がった気がする。また、五感を刺激できるような展示を行っていきたいと思った。

❸ グループ鑑賞を通じて、やはり着眼点は人それぞれで、それに対する思いを会話することの楽しさをとても感じた。

❹ 土管の猫やのぞき穴など、子どもの頃のワクワク感を思い出す仕掛けが多く楽しめました。また子どもの頃、毎週のように通っていた花やしきの映像や、昔持っていたものなどを見つけた瞬間は大変興奮し、誰かと共有したくてたまらないという気持ちが沸き上がりました。
これまでは、「過去は振り返らず前へ進む」べき、そうしなければならないと考えていました。しかし、前日から豊後高田の町を散策し、懐かしい景色に触れたことで、とても穏やかな気持になることができ、回想法のリラックス効果を実感しました。特に教室は昔通っていたそろばん教室に似ていたため緊張感がほぐれ、その雰囲気のせいか、初対面の方たちとも打ち解けやすかった気がします。
見学中、どこかで爪楊枝とガムを踏んで靴がべたべたになってしまったのですが、それすらも「昭和あるあるだよねー」と笑い話にできてよかったです。

❺ 平成生まれのため、個人鑑賞のときは知らないものばかりで見た目の面白さや知り合いが話していたものだ、という一歩おいたものに感じた。
しかし、グループで会話しながらモノへの理解、その人の思い出を聞くことで興味や楽しさを深めることができた。回想法にはなっていないが、当時を知っている人との交流も刺激となることを体感できた。

❻ キャプションのほとんどない展示スタイルについて、市橋先生が「モノでモノを説明し合う展示」と表現されていたのが強く記憶に残っています。その言葉を受けた後で再度展示を観に行くと「ここにこれがあるから、こうやって使っていたのかな？」などと想像や、グループの方々と会話が広がるのを感じました。空間そのものが、キャプションの役割を担っていたのだと理解できました。

❼ 収集癖という言い方は適切ではないかもしれないが、私自身はモノを大事に集めておくという事はあまりしないので、個人で見学しているときは「たくさん集めてるな」「昔こんなので遊んでたな」というような感じで見学していました。グループ討議をした後、グループ鑑賞をしていく中で、自然と昔の記憶や思い出をグループメンバーに説明していることに気づきました。話をしていく中で、個人で見たときにはなかった、新たな記憶が蘇ってきている事があり、話すことで脳内が活性されているのかなと研修会が終わってから感じました。

❽ 個人観賞の際は、所狭しと展示されている資料に視点が定まらず、漠然と鑑賞していました。また、私の育った環境ゆえか、実体験として懐かしいと感じるモノが少ないことに起因したのかもしれません。しかし、グループ鑑賞をすることで、他者の資料に対する感じ方、思い出などを知ることで、そこから自分の幼いころの記憶を回想し、相手とコミュニケーションをとることで、「その場が楽しい」といった感情が芽生えたことが自分に対して印象的でした。

❾ 個人鑑賞の時は、自分の好きなもの（興味のあるもの）に目がいきがちでしたが、グループ鑑賞になると、ほかの人の関心のあるものは何かと考えながら話題を振ろうとするので、一つ一つの資料に気を配ることができました。また、知っているはずの資料では、新たな情報を得られたことで見識が深まったり、まったく知らなかった資料を知って新たな興味につながったりと、意外な発見が数多くありました。グループで話をしていくうちに、幼少時に祖父がよく昔の遊び道具を作ってくれたり、祖母が若いころの話をよくしてくれたりなど、過去の様々な記憶がよみがえってきて、きっかけを得ることで思い出すことができるという意味を、身をもって理解することができました。

❿ 資料を見る時に、「これは今の何なのか？」「これは昔の何なのか？」という、資料に対してその昔の姿、或いは現代の姿を考えるという見る目が増えたと思います。モノ、コト、ヒトの過去と現在の姿の変遷を考え、どう投げかけるとアハ体験になるのかを考え準備することで、より充実したプログラムにすることもでき、また、日常的な展示案内でも利用できると思いました。

質問3
仲間とともに過ごした時間（コミュニケーションから生まれた新たな気づきなど）について、感想をお書きください。

❶ 今回の学芸員研修会は、民俗系・歴史系博物館の職員だけでなく、水族館職員、介護施設職員などの参加があり、様々な意見交換ができた。その中で、他の博物館や福祉施設との連携を強める事で、博物館の持つ資料等をこれまで以上に活かせるのではないかと感じた。

❷ 展示物を前に交流することで、その人、展示物への理解が深まり、話が盛り上がっていった。人との会話で視野を広げることができる。本の知識だけでなく、人から思い出を交えながら説明を聞くことで、身近に感じることができる。

❸ 自分の地域で今すぐに、実物の借用を実現するのは難しいかもしれません。しかし、こうしてモノの情報を専門に扱う学芸員の方々とお話することができる機会は、介護現場でより良い回想のきっかけを作る意味でも、有意義な時間だったと感じています。モノがなくても、五感に投げかけることは出来ると気づけたので、音や香りなど、こちらでも用意の可能なものから実践していきたいと思います。

❹ 年齢差や出身地の違いにより、資料に対する認識の差違が多々見られました。昭和の道具などは当時、実際に使用していた世代にとっては懐かしいものであるのに対し、30代の私にとっては見慣れないものも多く、それが却って新鮮に映りました。そうした世代間のズレに関して、普段であればそういうものだと受け流していましたが、今回はそのズレは世代を超えたコミュニケーションをとるきっかけの一つになり、体験談を引き出すことで、次の世代への文化の継承になると感じました。

❺ 回想法や高齢者プログラムは、どんなことをすればいいのとハードルを感じる分野であるとともに、今リアルタイムで活動を展開することが求められている分野でもあると思います。そうした中で、グループで鑑賞したことで、様々な発見や

6-8

見学（個人鑑賞）

展示解説

気づきが身近な内容にあり、楽しめたことで、「こうした視点の取り組みはしたことがあったぞ」「だったら、この部分に重点を置いて、こう展開したら回想法のプログラムになるのでは」など、具体的なアイディアが語り合えたことがとても学びになりました。

質問4
今回学んだことを、今後の学芸員活動、博物館活動でどのように活かしていきたいですか？

❶あらためて、博物館の今後の可能性を感じた。これまでは教育分野での博物館の役割が主であると思っていたが、回想法を取り入れる事で、福祉分野をとおして地域づくり、街づくりに繋がることを学んだ。この学びを活かし、五感を刺激されるような、展示や説明に取り組んでいきたい。

❷今回の研修会を終えて、これまで展示物そのものに、とらわれすぎていたように思えてきた。回想法をより深く学ぶことで、展示によっていかに話題を引き出せるかという視点に当面重点を置いて考えて行動したい。これからも継続して学ぶことで、より活動内容が社会貢献できる博物館運営を目指します。もしくは語ってもらった思い出をキャプションにしてみても面白いかもしれないと思いました。

❸講義の中であった、回想法を取り入れながら洗濯板の使い方を子どもたちに伝えるワークショップが参考になります。九州国立博物館は考古資料が主な展示物のため、身近な物から入り、考古資料へつないでいくことで回想法を促したり、考古資料を身近な物に感じたりすることが期待できる。また、世代間交流が行えるような幅広い年代層の対象者を募集する手法もあると考えます。

❹後日、職場で回想法のレクリエーションを行いました。7名の利用者で円形に座って頂き、樟脳袋をタブレット端末の画像でお見せして、そこから派生する記憶について互いに語って頂きました。徐々に話題が変化していきながらも、利用者同士で会話が深まっていくのを見て、思っていたほど、話の進行に頭を悩ませる必要はなかったと安堵したのを覚えています。こちらはきっかけを用意するだけで、話の方向をコントロールする必要はないのだと再認識しました。

❺回想法の講義を受けて、高齢者の健康寿命を引き上げる取り組みであるという事でしたが、小学生から高齢者まですべての人に記憶や思い出があります。高齢者だけでなく、次世代を担う若者（中学生～大学生）も巻き込んで、自分が経験したことなどを子どもたちに伝えていける体験型のプログラムを導入できればと思いました。

❻弥生時代や古墳時代を主とした考古資料を対象とする当館にとって、いわゆる回想法をそのまま取り入れることはなじまないことを自覚しつつ研修に参加しました。目的は回想法とは何かという基礎的な学びを得ることと、回想法の視点を応用した考古資料の楽しみ方を生み出せないか、という問題意識によるものです。結果、当館なりの回想法にヒントを得たワークショップのイメージを持つことができました。形や素材は異なっても、例えば昭和と弥生時代に共通するモノは存在するため、ちょっと昔の懐かしいモノを回想し、そこから1,000年、2,000年前のモノとの共通点や相違点を学ぶといった枠組みで、回想法を応用できれば面白いかもしれないと思っています。

6-8

見学（グループ鑑賞）

グループ発表

博物館リンクワーカー人材養成講座

連続講座オンライン語り場「withコロナでも地域住民とつながっていく方法を考える」という名称で開催

【開催趣旨】

カナダの医師会は2018年10月から、患者の健康回復を促進する治療の一環として、美術館への訪問を「処方箋に書く」取り組みを始めています。医師会とモントリオール美術館が連携し、心身にさまざまな健康問題を抱える患者とその家族などが、無料で美術館に入館し、芸術文化の健康効果を享受できるようにしました。

また、英国のウェストミンスター大学のAngela Clow氏は、ロンドンの労働者を対象に、昼休みにアートギャラリーを短時間訪問の前後で、ストレスマーカーとなる「コルチゾール検査」を行いました。訪問時はかなり高い値を示しましたが、見学後の数値は正常値に戻っていました。美術作品を昼休みの短時間に見るだけでも、ストレスの軽減になると報告しました（2006年）。

ところで、日本では団塊世代が75歳以上になる「2025年問題」に続き、団塊ジュニア世代が全て高齢者になる「2042年問題」が浮上し、社会保障費の増大、勤労世代の減少が大きな課題です。

そこで、本事業では、カナダをはじめ、米国、英国、台湾などの事例調査をもとに、高齢者の「博物館浴*」プログラム開発、そして医療・福祉従事者と高齢者、博物館などをつなぐリンクワーカー人材育成を目指すことで、「2042年問題」解決に向けた社会資源の新たな活用方策＝社会的処方の場となる「博物館健康ステーション」運用、さらに地域の高齢者医療の新たな枠組みを提案したいと考えます。

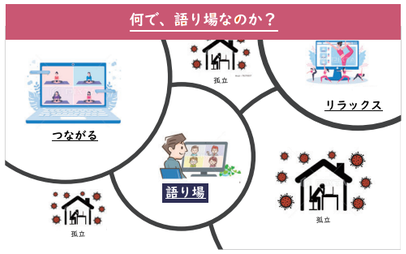
今回の連続講座は、「オンライン語り場」と名づけています。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）がなかなか収まらない中でも、地域の博物館、美術館などを活用しながら、高齢者をはじめ、地域住民とのつながりを粘り強く実践する医療・福祉従事者、大学教員、博物館学芸員からの話題提供を受け、その後は参加者と一緒に意見交換を行う「語り場」とします。

こうした「語り場」を通じて、地域の社会教育施設、医療・福祉機関が協働した「誰もが全国5,700ある博物館のリンクワーカー」という、新たな地域人材育成の方策やプログラム開発を考える機会を共につくりましょう。

＊博物館浴：博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動

何で、「連続講座オンライン語り場」なのか？



ほっとする90分を仲間たちと創りたい！

学びたい！、つながりたい！

リラックスしたい！

みんなの健康があって、博物館活動がある

「連続講座オンライン語り場」進行方法

各回（第2回以外）の開催時間は13:30～15:00（90分）とし、基本的に最初の30分は講師からの話題提供、その後はブレイクアウトルームで4名程度のグループを作りディスカッション（20分）、各グループからの発表（20分）、最後に参加者のふりかえり、講師からのコメントを受け終了。

開催方法

Zoomウェビナー方式によるリアルタイム講座

7

第1回

「博物館浴」研究の最前線

■ **講 師**
緒方 泉（九州産業大学地域共創学部地域づくり学科、教授）

■ **講師から一言**
英国、米国、イタリアなどで進む「博物館浴」研究論文や森林浴研究の実験方法を用いた、地域住民などを対象とした「博物館浴」実証データの紹介などから、研究の今と今後の方向性ついてお話します。

■ **開催日時**
2022年11月11日（金）13：30～15：00（13：15～受付開始）

■ **受講者数**
32名

■ **事後アンケート**
本日の感想をお書きください。

＊第1回目はどのような「語り場」になるのか、ワクワクしながら期待感を持って参加させていただきました。私自身にとっても、はじめて触れる知識や概念が多く学びの多い時間でした。あわせて、海外の事例など大変興味がありました(ゴッホ美術館NLD)。これまでArt・Musicが及ぼす影響力は私自身も幾度となく経験しており、Mind・Heartにどのような変化が起こるのか、「Happiness」(瞬間的な幸せ)と異なる「Well-being」(心身共に“持続可能な”幸せ)の追求(研究)がどのように発展していくのか、どうかご自愛され、存分にご活躍くださいますようお祈り申し上げます。

＊博物館浴にまつわる国際的な動向や、緒方先生が取り組まれている「感覚から科学へ」に向けた調査・研究の一端に触れることができ、短時間でしたが、大変刺激的で学びの多い講座でした。また、ブレイクアウトルームで南阿蘇ルナ天文台の宮本館長とご一緒したこともあって、天文台や動植物園、水族館の方々との連携も大切で、おもしろそうだと感じました。これまではあまり考えたことがなかったのですが、自身の活動のなかでつながっていけないか、考えてみたいと思いました。

＊博物館と福祉領域の連携が、今後ますます重要になってくること、そしてそれに対するアプローチとしての博物館浴について知ることができてとても勉強になりました。また、ディスカッションで様々な立場の方とお話しすることができ、新しい視点での気づきや、新しいつながりも得られたように思います。90分、楽しく過ごすことができました。

＊高齢社会を見据えて、学芸員の皆さんが文化の視点から動き出していることに対しうれしさと共に、その現象を福祉分野の仲間たちが知りつながっていく必要性を感じました。ただ、近畿、いや滋賀ではまだまだです。私どもの活動もエビデンスができていないのが、悩みです。活動を科学的に立証できるように、緒方先生から学んでいきたいと思いました。

第2回

「オンライン博物館浴プログラム」の実際

■ **講 師**
井上 幸一（福岡女子短期大学音楽科、准教授）、中込 潤（九州産業大学美術館、学芸室長）

■ **講師から一言**
2021年から始めた福岡県筑紫野市の介護施設職員向けの「オンライン博物館浴プログラム」。caregiverのストレス軽減、リサーチパートナーとの協働的なプログラム開発の事例について報告します。

■ **開催日時**
2022年11月18日（金）18：00～19：30（17：45～受付開始）

■ **受講者数**
23名

■ **事後アンケート**
本日の感想をお書きください。

＊講義の中でされたワークショップのような、絵画と音とを組み合わせた活動は初めてで、とても新鮮でした。複数の感覚を同時に刺激されるので、より立体的に記憶を遡ることができるのではないかと思いました。参加されている施設の方も楽しそうにされていたところも、とても印象的でした。

＊講座のなかでも少しお話ししましたが、絵画から音、楽器への活動の展開がすごくおもしろいと感じました。そのような展開のさせ方が私には意外に思えたのですが、井上先生からのコメントで、音楽の世界では絵画をみての即興演奏ということがよく行われているということを教えていただき、さらに興味が湧きました。ある分野では常識のようになっており、それほど珍しいことではないことでも、異なる分野でやってみると、違った展開となり、おもしろいことが起こるのだと改めて感じました。このようなことに気がつけるのも、いろいろな分野の人たちとご一緒できるからこそですね。

＊介護スタッフのための博物館浴プログラムであったが、とてもわかりやすい内容だった。個食・黙食が通常の食事になって、食べ物についての話もなかなかできない状況で、油絵を見て、豆腐について語り合うというのは誰もが参加できる内容だと思った。絵だけでなく、豆腐ラッパの音やチャルメラの音など聴覚にも訴える内容で、幅広く話しが広がってとても楽しかった。グループ討議でも共通の話題があるというのは親近感もわいて盛り上がった。介護スタッフの方は今回の内容を参考にして、患者さんに接することがあれば、患者さんもおおいに話が盛り上がって、楽しいひとときを過ごせるのではないかと感じた。

＊今回豆腐のメロディーやチャルメラの音色と、奏でるメロディーが設定されていて、すごく簡単に参加しやすそうでいいなぁ！！と思いました。以前参加した音楽療法の講座は絵をみてメロディー作りという、とても貴重で楽しい経験でしたが、すこし互いの意見をしっかり出し合わなければいけない大変な作業だなと感じた部分もあったので、「メロディーが決まっている」という方法が、とてもどなたでも参加しやすくて良いなァと感じました。今回のグループでの対話も大変充実した時間でした。3名とも楽器を準備していて、お互いに音色を聞かせあったりなど、楽器がツールとなって会話がはずみました。

＊実際のプログラム活動を見たり、オンラインで話し合いをしたりしている間、業務のことを忘れて参加することができ、ストレス軽減ができたように感じました。話し合いの場では上手く話せないこともありますが、今後の講座も楽しみながら参加しようと思います。

＊「鑑賞する」を個人の五感記憶ページから掘り起こし、作品の見た目だけでない描かれた背景までもを想像する、まるで作品の内部に入っていく感覚（まさに浴）でした。実際のプログラムの様子は決して無理やり感はなく、そこには「楽しい」「心地良い」という雰囲気に満ちあふれていたことも印象的でした。講師の参加者への接し方、語りかけ方が素敵だったことが大きいと思います。

第3回

「地域の生活」を美術館で展示する

■ **講 師**
山下 弘子（坂本善三美術館、学芸員）

■ **講師から一言**
小国町内の医療・福祉分野の皆さんと連携し、50歳以上の方々のさまざまな活動を「人生の表現」として紹介する展覧会「Over50（オーバーフィフティ）で楽しむ善三展」についてお話しします。

■ **開催日時**
2022年11月25日（金）13：30～15：00（13：15～受付開始）

■ **受講者数**
26名

■ **事後アンケート**
本日の感想をお書きください。

＊今回は、地域のご高齢の方と美術館とが連携しての取り組みで、とても興味深く拝聴いたしました。ワークショップや展覧会を通して、ミュージアムや資料が身近になり、ミュージアムがリラックスできる場所になりそうだと感じました。また、そういったものをオンラインなどで発信することで、さらに輪を広げられる可能性もありそうですね。

＊取組自体の面白さを感じるとともに、それを支える館のスタンスに感嘆しました。（あるいは学芸員さん個人のスタンスでもあるかもしれませんが。）ベースに「坂本善三」という揺るがない価値があればこそ挑戦できるという自覚、自館のもつ価値への再評価・再解釈を恐れない信頼が、素晴らしいと思いました。また、そこにあるものを「見るべき価値あるもの」として価値づけること自体がアートであるという視点は、まさに現代アート的な視点だと思いました。そこにあるモノをいかに編集して観る人の前に差し出すか、これぞキュレーターたる学芸員さんの存在意義・腕の見せ所ですね。

＊山下さんの活動はとても素晴らしいと思いました。坂本善三の作品に塗り絵という方法を使って新たな鑑賞と感動を生み、参加者にも充実感や達成感をもたらして本当にすごいと思います。坂本善三作品の新たな感動を生み出す活動と思います。学芸員のカガミです。博物館講座の授業でも、すごい学芸員としてお話できたらと思いました。また、「人間は褒められるとうれしい」というコメントは、とても納得できます。OVER50展に出展の皆様の笑顔も素敵でした。個人のコレクションや作品を発掘、展示して、出展者と美術館と地域が笑顔になる活動はもっと見たいと思いました。ちょっと遠いけど行ってみたいと思いました。

＊収蔵資料を他（多）分野の人たちに再解釈してもらい、その視線そのものも含めて展示していく手法が、大変興味深く、おもしろいと感じました。こうした手法は私が担当しているような民具資料などにも援用することができそうで、ぜひ参考にしたいと思いました。また、他（多）分野の人たちと連携する際に、普段やっていること同士をかけ合わせるやり方にも共感を覚えました。学芸員がたった1人のなか、さまざまな工夫で精力的に活動されている様子に勇気づけられました。

第4回

高齢者の記憶をもとにした「ふるさと絵屏風」を通じた活躍の場づくり

■ **講 師**
竜王 真紀（滋賀県甲賀市水口地域包括支援センター、保健師）

■ **講師から一言**
昭和初期の記憶をもとにした「ふるさと絵屏風」の制作支援を市内6地域で行なった。今回は制作された絵屏風を高齢者自身が出前講座やツーリズム等で活用する機会を創る、高齢者の活躍の場づくりを紹介します。

■ **開催日時**
2022年12月2日（金）13：30～15：00（13：15～受付開始）

■ **受講者数**
21名

■ **事後アンケート**
本日の感想をお書きください。

＊絵屏風を介して作られた地域の社会関係に大変感銘を受けました。老いや病の日々であっても、文化的活動を通して心健やかに生きることができる、ということを証明した素晴らしい事例だと思います。

＊絵屏風制作の過程と、Hさんの最後の手紙までのストーリーが本当にこみあげてくるものがありました。「ここには何もない、そんな絵なんて描けないし、誰が描くの？」から始まって参加者の皆さんのやりがい、生きがいにまでなっていて、すばら

しいなぁと感じました。博物館浴を通り越して、人の生きる喜び、地域の皆さんの日々の糧、やる気、元気を生み、更に地域貢献にもつながる活動。地域での何か活動を企てる時の一つの指針を教えて頂いたように感じます。

＊竜王先生の地域を何とかしようという熱い思いに感動します。高齢者が「何もないところや」とか「何もできん」とかネガティブな意識になりそうなところを、竜王先生は、「ここは素晴らしいところ！！」「私の人生には素晴らしい経験がいっぱい」とととても明るくポジティブに進めました。幸せな老後の日々をすごし、最期は充実した人生として幕を閉じることができ、本当に素晴らしいと思いました。老害などと言われ、社会との接点を持ちにくい高齢者にとって、竜王先生は救世主だと思います。

＊今回ご報告があった絵屏風は、消えていく風景や形のない記憶を共有できるものにし、未来に残すことができる、良い取り組みだなと思いました。スタンダードな回想法では、参加者から出てきた想いや語りはその場限りのものですが、それを残る形にする(しかも参加者自らが表現する)ことで、社会の中での自分の存在をよりアピールでき、自己肯定感を高めることにも繋がりそうだと感じました。また、単純に、コロナ禍みんなで集まる機会が減ってしまっている今、みんなで協力し、自分たちの手で一つのものを作り上げる取り組みは、癒しや楽しみを感じられる場となるし、そこになんらかの形でミュージアムも参加できるよう、取り組めることを考えてみたいと思いました。

第5回
「高齢者が美術館を楽しむために～シニアプログラムの実践を通して～

■ **講 師**
鬼本 佳代子（福岡市美術館、主任学芸主事）

■ **講師から一言**
社会教育施設･生涯学習施設として美術館は高齢者とどう向き合うのか。福岡市美術館が実施する65歳以上を対象とした「いきヨウヨウ講座」や他館と連携したオンライン回想法などを通して考えます。

■ **開催日時**
2022年12月9日（金）13:30～15:00（13:15～受付開始）

■ **受講者**
25名

■ **事後アンケート**
本日の感想をお書きください。

＊前回の竜王先生の場合、地域に残る伝統行事を記憶に残す活動でした。今回は福岡市で、特に地域の行事などと関係しない高齢者の活動ということで身近に感じました。第4回の時の語り場で、「私の住んでいる所は平成元年の新興住宅地です。団塊の世代が作ってきた、伝統行事のない場所で、2025年問題も緊急課題です。このような地域の高齢者の積極的な活動支援が必要」と述べたのですが、その答えが今回の鬼本先生の事例紹介で回答になっていて、とてもタイムリーな報告で感動しました。また、アウトリーチ活動や美術館の送迎バス活動は今後の高齢者の活動にとても有効であると思いました。

＊ルームでのルナ天文台の宮本館長からのご指摘（専門知と、普及活用やアウトリーチをどのように接合していくのか）も印象的で、いろいろと考えさせられました。今回の鬼本さんの取り組みでは、ワークショップや回想法の参加者が作品を鑑賞するだけでなく、作品づくりにも取り組んでおられました。こうした美術館の方々の手法は、先述の課題を考える上でも重要なことのように思いました。

第6回
高齢者施設の民具を用いた「地域回想法」の実際

■ **講 師**
長谷川 健（老人保健施設アルカディア氷見、脳外科医）

■ **講師から一言**
草深い山裾の老人保健施設です。氷見市立博物館の貸出し民具（海編、山編）を用いて、認知症高齢入所者のケアや家族介護教室で懐かしい思い出を語り合う地域回想法の事例をお話します。

■ **開催日時**
2022年12月16日（金）13:30～15:00（13:15～受付開始）

■ **受講者数**
26名

■ **事後アンケート**
本日の感想をお書きください。

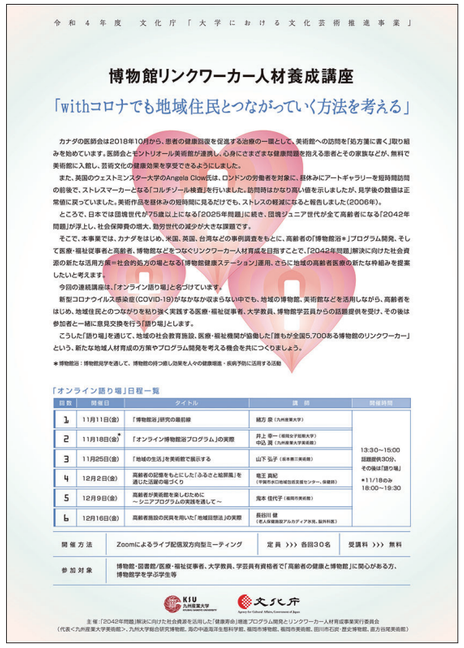
＊脳外科の視点から、記憶に関する脳の仕組みや感覚を刺激することの有用性を知ることができてよかったです。特に固いものをしゃぶって食べることが、口のリハビリになるということが印象的で、食べ物を使った回想法もこれから機会があれば取り組んでみたいと思いました(博物館の中ではなかなか難しいことではありますが)。施設や利用者さんにとって、博物館がどうお役に立てるのかというところももっと考えてみたいと思います。

＊医療現場でどの様な活動が行われているのか、アートの領域とは違った分析に、頷いたり感心したりの連続でした。地域に密着した回想法がとても自然に実施されていることも、スタッフの方々の努力も含めて素晴らしいと思いました。

＊難しい内容なのかなと、想像いたしておりました。しかし、専門的な解説もありつつ、実践紹介の長谷川先生が、豆腐は不人気だった、次はバームクーヘン！次は次はと、挑戦している様子を語る解説に、ふと、今これは回想法の講座！？と思うほどに、自然な楽しみの中で行われている事を知ることができありがたかったです。また、その根底に脳科学専門の裏付けや、地域博物館との連帯にも積極的に取り組まれていてこそということも、学ばせていただきました。

＊印象的だったのは、長谷川先生が非常に楽しそうに活動されていたことです。思い返せば、これまでの講師のみなさんも楽しんで活動に取り組んでおられました。よい博物館活動をするには、まず私たちの健康、そして楽しむことという、当たり前ですが、ついつい忘れがちなことに改めて気付かされました。

オンライン講座チラシの表と裏



令和4年度 文化庁「大学における文化芸術推進事業」

博物館リンクワーカー人材養成講座
「withコロナでも地域住民とつながっていく方法を考える」

カナダの医師会は2018年10月から、患者の健康回復を促進する治療の一環として、美術館への訪問を「処方箋に書く」取り組みを始めています。医師会とセントリール美術館が連携し、心身にさまざまな健康問題を抱える患者とその家族などが、無料で美術館に入館し、芸術文化の健康効果を享受できるようにしました。

また、英国のウェストミンスター大学のAngela Clowは、ロンドンの労働者を対象に、昼休みにアートギャラリーを短時間訪問の前後で、ストレスマーカーになるコルチゾール検査を行いました。訪問時はかなり高い数値示しましたが、見学後の数値は正常域に戻っていました。美術作品を昼休みの短時間に見るだけでも、ストレスの軽減になると報告しました(2006年)。

ところで、日本では団塊世代が75歳以上になる「2025年問題」に続き、団塊ジュニア世代が全て高齢者になる「2042年問題」が浮上し、社会保障費の増大、勤労世代の減少が大きな課題です。

そこで、本事業では、カナダをはじめ、米国、英国、台湾などの事例調査をもとに、高齢者の「博物館浴＊」プログラム開発、そして医療・福祉従事者と高齢者、博物館などをつなぐリンクワーカー人材育成を目指すことで、「2042年問題」解決に向けた社会資源の新たな活用方策＝社会的処方の場となる「博物館健康ステーション」運用、さらに地域の高齢者医療の新たな枠組みを提案したいと考えます。

今回の連続講座は、「オンライン語り場」と名づけています。

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)がなかなか収まらないなかでも、地域の博物館、美術館などを活用しながら、高齢者をはじめ、地域住民とのつながりを結び直し実践する医療・福祉従事者、大学教員、博物館学芸員からの話題提供を受け、その後は参加者と一緒に意見交換を行う「語り場」とします。

こうした「語り場」を通して、地域の社会教育施設、医療・福祉機関が協働した「誰もが全国5,700ある博物館のリンクワーカー」という、新たな地域人材育成の方策やプログラム開発を考える機会を共につくりましょう。

＊博物館浴：博物館活学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・病病予防に活用する活動

「オンライン語り場」日程一覧

回数	開催日	タイトル	講 師	開催時間
1	11月11日(金)	「博物館浴」研究の最前線	緒方 泉（九州産業大学）	13:30～15:00
2	11月18日(金)	「オンライン博物館浴プログラム」の実際	井上 幸一（福岡女子短期大学） 中込 潤（九州産業大学美術館）	開館時30分。 その後は「語り場」 ＊11/18のみ 18:00～19:30
3	11月25日(金)	「地域の生活」を美術館で展示する	山下 弘子（前市東三美術館）	
4	12月2日(金)	高齢者の記憶をもとにした「ふるさと絵屏風」を通じた活動の場づくり	竜王 真紀（宇都宮市立二荒山神社宝物センター、保健師）	
5	12月9日(金)	高齢者が美術館を楽しむために～シニアプログラムの実践を通して～	鬼本 佳代子（福岡市美術館）	
6	12月16日(金)	高齢者施設の民具を用いた「地域回想法」の実際	長谷川 健（老人保健施設アルカディア氷見、脳外科医）	

開催方法	Zoomによるライブ配信双方向型ミーティング	定員 ››› 各回30名	受講料 ››› 無料
参加対象	博物館・図書館/医療・福祉従事者、大学教員、学芸員有資格者で「高齢者の健康と博物館」に関心がある方、博物館学を学ぶ学生等		

KIU 九州産業大学 Kyushu Sangyo University　文化庁 Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

主催：「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した「健康寿命」増進プログラム開発とリンクワーカー人材育成事業実行委員会
（代表＜九州産業大学美術館＞、九州大学総合研究博物館、海の中道海洋生態科学館、福岡市博物館、福岡市美術館、田川市石炭・歴史博物館、直方谷尾美術館）

令和4年度 文化庁「大学における文化芸術推進事業」

博物館リンクワーカー人材養成講座
オンライン語り場

第1回 11月11日(金) 開催 13:30～15:00（受付13:15～）
「博物館浴」研究の最前線
講師：緒方 泉（九州産業大学）
英国、米国、イタリアなどで進む「博物館浴」研究紹介や最新研究の実践方法を用いた、地域住民などを対象とした博物館浴(実践データの紹介を含む)から、研究のやこれからの方向性についてお話します。

第2回 11月18日(金) 開催 18:00～19:30（受付17:45～）
「オンライン博物館浴プログラム」の実際
2021年から始めた福岡県高齢者向けの「博物館浴実践プログラム」campaign02より人材育成、リサーチパートナーとの協働共同プログラム開発の実例について報告します。
講師：井上 幸一（福岡女子短期大学）、中込 潤（九州産業大学美術館学芸員）

第3回 11月25日(金) 開催 13:30～15:00（受付13:15～）
「地域の生活」を美術館で展示する
小国町内の医療・福祉分野の皆さんと連携し、50歳以上の方やさまざまな活動を「人生の表現」として続けさせる展覧会「Over50オーバーフィフティ」で楽しむ様子展示についてお話します。
講師：山下 弘子（Hiroko YAMASHITA）前市東三美術館学芸員　Photo by Fai Kawano

第4回 12月2日(金) 開催 13:30～15:00（受付13:15～）
高齢者の記憶をもとにした「ふるさと絵屏風」を通じた活動の場づくり
昭和初期の記憶をもとにした「ふるさと絵屏風」の制作支援を市内的地域でけっぱ。今回は市のさだと絵屏風を高齢者自身が自低講座やワーリズム等で活用する機会を創る、高齢者の活動の場づくりを紹介します。
講師：竜王 真紀（Maki RYUO）宇都宮二荒山神社宝物センター所長、保健師

第5回 12月9日(金) 開催 13:30～15:00（受付13:15～）
高齢者が美術館を楽しむために～シニアプログラムの実践を通して～
社会教育施設・生涯学習施設として美術館は高齢者とどう向きあうか。福岡市美術館が実施する65歳以上を対象とした「いきヨウヨウ講座」や他館と連携したオンライン回想法などを通して考えます。
講師：鬼本 佳代子（Kayoko ONIMOTO）福岡市美術館主任学芸主事

第6回 12月16日(金) 開催 13:30～15:00（受付13:15～）
高齢者施設の民具を用いた「地域回想法」の実際
草深い山裾の老人保健施設です。氷見市立博物館の貸出し民具（海編、山編）を用いて、認知症高齢入所者のケアや家族介護教室で懐かしい思い出を語り合う地域回想法の事例をお話します。
講師：長谷川 健（Takeshi HASEGAWA）老人保健施設アルカディア氷見施設、脳外科医

【参加にあたっての注意事項】
❶ 参加には Wi-Fi などの安定した通信環境と、インターネットに接続したパソコンやタブレット、スマートフォンが必要になります。
❷ 円滑な参加のために、事前にミーティング用Zoomクライアントをインストールしておくことを勧めします。インストールはこちらからご参照ください。https://zoom.us/download#client_4meeting ❸ ZoomのURLの転送、視聴中の録画や録音は固く禁じます。

メール申込はこちら

申込方法	受講希望の方は、❶件名：連続講座 ❷内容：氏名（ふりがな）、所属、職名、この連続講座に期待することを書いて、E-mail：museum03@ip.kyusan-u.ac.jp へ、お申込みください。なお、申込締切は10月21日(金)とします。申見参加希望の場合はお問い合わせください。
参加対象	博物館・図書館/医療・福祉従事者、大学教員、学芸員有資格者で「高齢者の健康と博物館」に関心がある方、博物館学を学ぶ学生等
開催方法	Zoomによるライブ配信双方向型ミーティング　定員 ››› 各回30名　受講料 ››› 無料
問合せ先	中込 潤（実行委員会事務局長、九州産業大学美術館学芸員長） E-mail：museum03@ip.kyusan-u.ac.jp
事業責任者	緒方 泉（九州産業大学地域共創学部教授）
主 催	主催：「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した「健康寿命」増進プログラム開発とリンクワーカー人材育成事業実行委員会（代表＜九州産業大学美術館＞、九州大学総合研究博物館、海の中道海洋生態科学館、福岡市博物館、福岡市美術館、田川市石炭・歴史博物館、直方谷尾美術館）

KIU 九州産業大学 Kyushu Sangyo University　文化庁 Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

オンライン講座

オンライン講座

博物館のリラックス効果に関する実態調査

リンクワーカーがつないだプログラム参加者への生理測定、心理測定による効果評価の調査

【目 的】

九州・沖縄各県で実施する「健康寿命」増進プログラム開発講座参加者を対象、心理測定（POMS）、生理測定（血圧、脈拍）を行い、プログラムのリラックス効果評価を分析判定する。こうしたエビデンスの蓄積をもとに、地域の博物館と医療・福祉機関をつなぐリンクワーカーに情報提供できる、高齢者のフレイル予防、健康寿命を伸ばすためのプログラム研究開発に結びつけたい。今回は、以下の5会場で実施した。実施に当たり、対象者の承諾を得た。

1 「音楽療法in宮崎」

- **講　　師**　井上 幸一（福岡女子短期大学音楽科准教授）専門分野：音楽学/音楽療法
- **開催日時**　2022年8月8日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）
- **開催場所**　都城歴史資料館（宮崎県都城市都島町803）
- **実施方法**　心理測定（POMS）、生理測定（血圧、脈拍）

2 「音楽療法in沖縄」

- **講　　師**　井上 幸一（福岡女子短期大学音楽科准教授）専門分野：音楽学/音楽療法
- **開催日時**　2022年8月22日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）
- **開催場所**　本部町立博物館（沖縄県国頭郡本部町大浜874-1）
- **実施方法**　心理測定（POMS）、生理測定（血圧、脈拍）

3 「園芸療法in熊本」

- **講　　師**　岩崎 寛（千葉大学大学院園芸学研究科准教授）専門分野：環境健康学
- **開催日時**　2022年8月11日（木）10:00～17:00（9:30～受付開始）
- **開催場所**　熊本市現代美術館（熊本県熊本市中央区上通町2-3）
- **実施方法**　心理測定（POMS）、生理測定（血圧、脈拍）

4 「園芸療法in長崎」

- **講　　師**　岩崎 寛（千葉大学大学院園芸学研究科准教授）専門分野：環境健康学
- **開催日時**　2022年8月29日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）
- **開催場所**　長崎県美術館（長崎県長崎市出島町2-1）
- **実施方法**　心理測定（POMS）、生理測定（血圧、脈拍）

5 「回想法in大分」

- **講　　師**　市橋 芳則（北名古屋市歴史民俗資料館長）専門分野：博物館学
- **開催日時**　2022年10月3日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）
- **開催場所**　駄菓子屋の夢博物館（大分県豊後高田市新町1007-5）
- **実施方法**　心理測定（POMS2）、生理測定（血圧、脈拍）

博物館健康ステーション / ミュージアム・カフェ事業

【目 的】

九州産業大学教員と博物館リンクワーカー人材養成講座を受講した博物館関係者等が地域住民を対象とした「博物館健康ステーション/ミュージアムカフェ事業」を企画立案・実施運営し、博物館資料を活用した新たな「博物館浴プログラム」を開発すると共に、ミュージアムカフェを開催し、地域博物館における居場所づくりを進める。

なお、「博物館浴プログラム開発」に当たっては、鑑賞前後の生理測定・心理測定を実施し、その効果を科学的に評価する。

1

［見学（個人鑑賞）］

- **開催場所**　九州国立博物館
- **参 加 者**　37名（1月5日(木)18名、6日（金）19名）
- **開催日時**　2023年1月5日(木)、6日（金）

2

［民具にさわり、語り合う］

- **開催場所**　甲賀市役所
- **参 加 者**　31名
- **開催日時**　2023年1月13日(金)

3

［生理測定（血圧、脈拍）］

- **開催場所**　美濃加茂市民ミュージアム
- **参 加 者**　16名
- **開催日時**　2023年1月24日(火)

4

［まち歩き］

- **開催場所**　飯塚市歴史資料館
- **参 加 者**　11名
- **開催日時**　2023年1月29日(日)

5

［心理測定（POMS）］

- **開催場所**　宮古島市総合博物館
- **参 加 者**　13名
- **開催日時**　2023年2月12日(日)

多言語学習教材開発事業

博物館が有する「守る技術（保存・修復）」「調べる技術（調査研究）」「見せる技術（展示）」「伝える技術（教育普及）」（以下、4つの技術）を学ぶために、これまで「仏像」「茶器」「掛軸」「着物」「刀剣」「甲冑」などの取り扱いを紹介する博物館学習映像教材「学芸道」を制作し、シリーズ化してきた（26項目）。これらは、現職学芸員、学芸員を目指す学生、そして「博物館が大好きな」高齢者の学習教材となっている。今回、これらのうちから、「刀剣のメンテナンス」「着物の取り扱い」の計2本を英語版として多言語化することで、「いつでも、どこでも」受講可能なオンライン学習映像教材が、海外博物館、美術館などへ広く紹介できるようにした（今回の作成で、26項目36本となった）。また、外国人住民、訪日外国人にとっても、博物館の4つの技術を知る、日本文化を知る、そして博物館のバックヤードを知る教材となることが期待できる。

10

刀剣のメンテナンス

着物の取り扱い方

海外博物館、美術館などにおける「健康寿命」増進プログラム及びリンクワーカーの実態調査

2020年度の交流事業の様子

プログラム Met Escapesの様子

ホイットニー美術館 インタビューの様子

イントレピット海上航空宇宙博物館 インタビューの様子

アメリカンフォークアートミュージアム

＊新型コロナウィルス感染症（COVID-19）拡大のため、現地調査中止

ロイヤル・スコティッシュ・アカデミー

ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー インタビューの様子

国立スコットランド博物館

ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー インタビューの様子

11

英国博物館関係者を招聘した国際シンポジウム事業

今回は、新型コロナウィルス感染症（COVID-19）感染拡大のため、海外からの博物館関係者の招聘や参加者の国内移動が困難となったため、2023年2月18日（土）にオンラインで開催した。

シンポジウムチラシの表と裏

表 面

裏 面

2023九州産業大学国際シンポジウム「芸術文化・博物館浴による、子ども・若者のメンタルヘルス支援を考える」

【開催趣旨】

博物館は地域社会で、どんな役割が果たせるのでしょうか?

私たちは、そんな疑問を持つ中、「博物館と医療・福祉の連携」に注目しました。そして、文化庁からの支援を受け、米国や英国の先進事例調査を進め、両国の博物館関係者と交流を続けてきました。

近年は、その成果を広く日本の博物館関係者と共有するため、2019年は「地域社会での博物館の役割」、2020年は「博物館と医療・福祉とのよりよい関係」、2021年は「コロナ禍での博物館活動」「博物館と高齢者の健康、幸福感」、そして2022年は「博物館浴＊と高齢者の健康、幸福感」をテーマに、米国、英国をつないだ国際シンポジウムを対面やオンラインで開催しました。

2023年は、「芸術文化・博物館浴/子ども・若者/健康・メンタルヘルス・Wellbeing」をキーワードにします。

ユネスコの「世界子供白書2021」によると、世界の1億6000万人強の10歳～19歳の子どもや若者が、メンタルヘルス支援の必要があると報告しています。日本（国立成育医療研究センター調査）や英国（NHS＝国民保健サービス調査）でも、6人に一人の割合となるという調査結果があります。こうした深刻な事態の改善に向け、地域の社会資源の一つである博物館は、どのようなメンタルヘルス支援ができるのでしょうか?

そこで今回は、「芸術文化と健康」に関する国家プロジェクト＝‘SHAPER’（Scaling-up Health-Arts Programmes:Implementation and Effectiveness Research）を主導する、英国、King’s College London、そして「博物館コレクションを活用した、子ども・若者のメンタルヘルス支援プログラム＝‘Together Through Art project’を展開している英国、ダリッチ・ピクチャーギャラリーから事例報告を受け、その概要・成果や今後の展望について、日本の参加者と一緒に考えていきたいです。

＊博物館浴：博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動

12

開催日時
2023年2月18日（土）19:00～21:30（オンライン開催）
＊英国現地時間/10:00～12:30

オンライン調整会場
九州産業大学総合情報基盤センター
（福岡県福岡市東区松香台2-3-1 中央会館3階）

開催方法
❶ZOOMによるオンラインにて、日本、英国を同時中継して行う。❷（株）サイマル・インターナショナルによる同時通訳で行う。同時通訳アプリ「interprefy」の使用。

参加者数
141名（オンラインによる申込数188名）

参加者の国際シンポジウムへの期待の声（抜粋）
○子どもや若者のメンタルヘルスに対し、美術館が活用されている海外の取り組みに大変興味があります。身近に悩んでいる子ども達がおりますので、是非学ばせていただきたいと思います。

○ コロナ禍３年目。孤立を一層深める地域に対して芸術は、博物館は、どんな関わりを試みて、どんな気づきを得られたのか。３年目の現在地について聞きたいと思います。

○ ２年連続でシンポジウムに参加し、内外の先進的な取り組みに感動し、博物館、美術館が持つポテンシャルを高めるために自分も努力したいと考えるようになりました。今年のテーマも大変刺激的です。

○「産後うつ、周産期の人たち」などへのメンタルヘルス支援、美術館のコレクションを活用した「児童生徒」へのメンタルヘルス支援など、これらの具体的な取り組みとその効果をうかがえることに期待します。

○ ミュージアムがメンタルヘルス維持・向上に寄与していることは感覚的には分かるが、どのようなプログラムを意識的に企画し、体制を整備しているか（"ユニーク"な来館者への現場対応も）。また、その効果を評価しているのかを学び、考えさせていただきたいと思います。

○ 海外の先進的な取り組みに触れる貴重な機会で、毎回楽しみにしています。今回は、子ども・若者のメンタルヘルス支援がテーマということで、これまでの高齢者福祉を中心とした視点からさらに、「アート×地域社会」の可能性が広がる予感がしています。

○ 博物館が如何に子どもや若者のメンタルヘルスの支援に役割を果たすのか、また英国の事例を如何に日本の現場に置き換えることができるのかについて、具体的に議論がなされることに関心があります。

○ 終わりの見えないコロナ禍の只中で、ミュージアムの役割と存在意義をみつめ直すとともに、ミュージアム自体の健康でサスティナブルなありかたについても考える契機としたいです。

○ シンポジウムでお話しされる事例につきましては、エビデンスの研究手法や、現場を進めていくにあたっての人材の育成や予算の獲得について、それぞれの事例でどのようにされているか関心があります。

○ 博物館の教育普及に関心があります。しかし、美術館・博物館での「学び」にばかり着目しがちで、メンタルヘルス支援に活用できるという視点はありませんでした。海外での取り組みを通して、日本でも実現できることはないか、新しい知見が得られることを期待しております。

○ 美術館が今まで以上にできることはないかと模索する日々ですので、美術館のコレクションを活用した「児童生徒」へのメンタルヘルス支援の事例などを参考に、示唆を得たいです。

○「産後うつ、周産期の人たち」や「児童生徒」へのメンタルヘルス支援の事例を知ることで、今後の運営に活かしていきたいと思います。

○ イギリスにおいて博物館がメンタルヘルス支援を進めるにあたり、医療福祉専門職等とどのような連携をしているのか？その際の医療福祉専門職の役割について知る事ができればと思います。

○ 日本でも子供・若者を対象としたミュージアムのプログラムはたくさん実践されていますが、多くは学校連携が中心で、医療福祉関係と連携したものはまだまだ少ないかと思います。英国の貴重な事例をお伺いできるのを楽しみにしております。

○ King's College Londonとダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの最新情報（特に福祉的活動を支える財政基盤）や、コロナ及びウクライナ情勢が英国経済に与えた影響を各機関がどのように受けているかが伺えることを期待しております。

○ ワークショップで、CPFがどんな役割を果たしているのかを知りたいです。

○ CPFになるためには、どんな研修がありますか。CPFはどんな人が選ばれますか？

○ CPFは子どもたちにどんな支援をしますか？ CPFのやりがいは何ですか？

開催内容
タイトル

芸術文化・博物館浴による、子ども・若者のメンタルヘルス支援を考える

登壇者
◉ **ニッキー・クレーン**（Nikki Crane）
英 国：King's College London（Programme Lead-Arts,Health & Wellbeing）

◉ **ジェーン・フィンドレー**（Jane Findley）
英国：ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー /'Together Through Art project' 統括者

◉ **キンバリー・クッキー -ガム**（Kimberly Cookey-Gam）
英国 ：ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー /Creative peer facilitator in 'Together Through Art project'

司会進行
緒方 泉（Izumi Ogata）/九州産業大学地域共創学部教授

開会の挨拶 日本時間 19:00
大日方 欣一（Kinichi Obinata）/九州産業大学美術館長

ニッキー・クレーン 19:05~19:25
なぜいま「芸術文化と健康」に関する国家プロジェクトを行うのか？ –'SHAPER'（Scaling-upHealth-ArtsProgrammes: Implementation and Effectiveness Research）が目指すものとは？ –

ジェーン・フィンドレー 19:25~19:50
博物館のコレクションを活用した'Together Through Art project' は、若者・子どもたちのメンタルヘルスをどう支援しているのか？

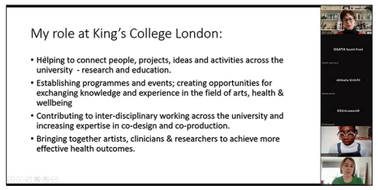
キンバリー・クッキー –ガム 19:50~20:10
私が'Together Through Art project' に参加して得た「幸福感」とは？

休 憩 20:10~20:25

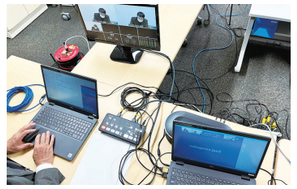
質問を基にしたディスカッション 20:25~21:15

英国3名から、まとめのメッセージ 21:15~21:25

開会の挨拶 21:25~21:30
大日方 欣一（Kinichi Obinata）/九州産業大学美術館長



ニッキー氏講演


国際シンポジウム通信テスト（2月6日）

ジェーン氏講演

国際シンポジウム当日

キンバリー氏講演

国際シンポジウム当日

【発表趣旨】

なぜいま「芸術文化と健康」に関する国家プロジェクトを行うのか？ – 'SHAPER'(Scaling-up Health-Arts Programmes:Implementation and Effectiveness Research)が目指すものとは？ –

ニッキー・クレーン（英国）

SHAPER(Scaling-up Health Arts Programmes: Implementation and Effectiveness Research[芸術介入健康プログラムの拡張:実施と有効性の研究])は、ウェルカム・トラストの助成金による大規模な研究プロジェクトで、サウスイースト・ロンドン(ロンドンの南西エリア)を対象に、心の健康のための芸術に基づいた介入の効果と拡張性を探ることを目的としています。同プロジェクトは、臨床医・研究者・慈善団体・芸術家・大学の保健医療専門家・NHS(国民保険サービス)・慈善事業部門のチームにより実施されています。研究は産後鬱・産前産後の心の健康、パーキンソン病、脳卒中をテーマとする3つの芸術介入プログラムを対象としており、800人の市民の参加を見込んでいます。同プロジェクトの目標はNHSの組織および臨床責任者を触発し、「社会的処方箋」の範囲を拡大してエビデンスに基づいた芸術介入を定期的に「処方」できるようにすることです。

心の健康のための芸術に基づいた介入における大きな課題として、持続的な資金調達の道筋が立っていないこと、臨床責任者との協力が制限されていること、臨床上のエビデンスが不足していること、現行の診療計画表に組み入れるのが難しいことが挙げられます。SHAPERではこれらの課題への対応策として、小規模な試験的研究プロジェクトで有望な結果を示した現行の地域の芸術介入プログラムを拡張することを目指しています。そのプログラムとは、ブリーズ・アーツ・ヘルス・リサーチ(Breathe Arts Health Research)の「産後鬱の母親と歌おう(Melodies for Mums /postnatal depression)、イングリッシュ・ナショナル・バレエ団の「パーキンソン患者と踊ろう(Dance for Parkinson's)」、ロゼッタ・ライフの(Rosetta Life)の「脳卒中の冒険(Stroke Odysseys)」の3件です。将来的にはこれらのプログラムをサウスイースト・ロンドンの大学および臨床関係のパートナーが共同で運営するキングス・ヘルス・パートナーズ(King's Health Partners)の診療計画表に組み入れ、数多くの地域住民に適用することを考えています。

コロナ禍により2020年から21年にはSHAPERのプログラムの多くがオンラインで提供され、対面での介入試行が延期されていたのですが、そのおかげで2つの実施方法を比較検討することができました。例えば、産後鬱をテーマとする予備研究プログラムSHAPER-PNDでは、産後の母親の鬱症状の軽減にオンラインでの歌のセッションが有効かどうかを調査しました。この調査は英国でのコロナ対策のロックダウン実施に伴い、社会的孤立や心の健康への影響が拡大した時期に行われました。その結果、オンラインでの歌のセッションが産後鬱・不安・ストレス症状の有意な減少と幸福感の有意な増加に関連しており、その効果はセッション終了後、少なくとも6カ月間持続することが分かりました。セッションへの出席率も高く、経過観察・評価も適切に行われたため、歌のセッションのオンラインでの実行が可能であることが判明しました。今回の調査対象の大半は、比較的年齢が高く高学歴で結婚または同棲をしており、就業または産休中の白人女性でしたが、その中の多くが鬱病・幼児期の虐待・パートナーからの暴力の全てまたはそのいずれかを体験していました。今回のオンライン調査の結果として、オンラインでの歌のセッションは、とりわけ社会的孤立や対面での治療が困難な状況にある人々の産後鬱の治療に期待できる可能性が示されました。

産後鬱についての対面での臨床試験とSHAPERでの「パーキンソン患者と踊ろう(Dance for Parkinson's)」の試行は今もなお継続しており、脳卒中に関する介入のデータについては現在分析作業を進めています。

全体として、SHAPERは「芸術と心の健康」分野において意義ある前進を示しています。その理由は、芸術に基づいた介入をNHSの日常診療に組み込むために、拡張・実行可能で費用対効果の高いモデルを提供することを目指しているからです。こうした介入の臨床効果と費用対効果を実証することが、芸術に基づいた介入が心の健康の医療により広く導入されることに繋がり、そうした介入が効果を上げて人々の生活を向上させる――SHAPERはその可能性を秘めています。

【発表趣旨】

博物館のコレクションを活用した 'Together Through Art project' は、若者・子どもたちのメンタルヘルスをどう支援しているのか？

ジェーン・フィンドレー（英国）

この報告では，ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの「健康と幸福」に対する取り組みをテーマに，当美術館のプログラム「Together Through Art」の事例をご紹介します。このプログラムは，心の健康に問題を抱えた体験を持つ若者を対象とする研修・育成プログラムで，創造的芸術を介して若者の幸福感を高めることを目的としています。このプロジェクトを実施した際の具体的な手順と，私たちが学んだ主なポイントをお話ししたいと思います。

ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーでは，あらゆる人が有意義にアートと関わることのできる場の創出に意欲的に取り組んでおり，過去と現在の芸術作品を通じて新たな視点を引き出すことで、訪れる全ての人にひらめきを与えることのできる文化施設となることを理想としています。芸術作品を一般大衆に公開するという創立者の革新的な構想に忠実に従い、画期的な企画展プログラム、共同展示制作、現代の芸術家への制作依頼、創作活動等を行っており、人々の生活に創造性を根付かせることで、より健康的で幸福なコミュニティーを生み出し、積極的に前向きな変化をもたらすことを目的としています。

当美術館の「健康と幸福」に対する取り組みは、医療関連のパートナーと協力して行っており、芸術作品と創造性を活用し、心の健康・社会的孤立・長期的健康の諸分野におけるより多くの成果につなげることを目的としていますが、その中では協働や地域密着型の手法を推進しています。当館の取り組みはさまざまなパートナーシップを通じて展開しており、そうしたパートナーには「サウス・ロンドン&モーズリーNHSファウンデーション・トラスト(South London and Maudsley NHS Foundation Trust[SLaM])リカバリー・カレッジ(Recovery College)」と「テッサ・ジョエル医療センター(Tessa Jowell Health Centre)」が挙げられます。「健康と幸福」関連のプログラムには、心の健康に関する医療サービスを受けたことのある人々との共同制作、幸福感を高めるツールとして芸術作品を人々に「処方」する「社会的処方」、癒しの空間をさらに向上させる新たな芸術作品の制作依頼等があります。

当館は元来、芸術作品に触れることが人々の心の健康を支える有益なツールとなり得ることを認識していましたが、パートナーシップ・モデルを用いて地域の医療関連パートナーと協働することにより、地域のニーズに対応したプログラムやプロジェクトを策定することが可能となりました。さらには当館施設・収蔵品・企画展・敷地を「健康と幸福」を支援するための資源として活用する数々の新たな方法を見出すことにも繋がりました。

当館のプログラム「Together Through Art」は、心の健康に問題を抱えた体験を持つ若者を支援し、心の健康にまつわる症状を和らげることを目的としています。

「サウス・ロンドン&モーズリー(South London and Maudsley[SLaM])メンタルヘルス・トラスト・リカバリー・カレッジ(Mental Health Trust Recovery College)」との協働により、当館では試験的に、地域住民で心の健康に関する小児・成人向け医療サービスを利用したことのある18歳から25歳の若者5名を対象として、有料の研修・育成プログラムを実施しました。このプロジェクトは、同プログラム参加者にツールを授けて日々の生活の中で創造性によって幸福感を支えたという経験を重ねてもらい、その経験を分かち合うことで地域の児童・若者を支援することを目的としていました。

対象者は当館とSLaMリカバリー・カレッジが実施する6カ月間の有料の研修・育成プログラムに参加し、「クリエイティブ・ピア・ファシリテーター(Creative Peer Facilitators[CPF's])の肩書を得た上で、当館の芸術家チームと協力し、共同制作モデルを用いて地域の初等・中等学校の生徒を対象に、生徒のグループそれぞれに合わせた「創造性と幸福ワークショップ」を策定し実施しました。これらのワークショップでは、当館所蔵の芸術作品を起点として、生徒たちと共にクリエイティブ・レジリエンス(創造力による回復力)、マインドフルネス，文化資本について検討を行いました。

このプロジェクトで最も苦労したことの一つは、全ての創造性ワークショップ実施チームを各学校グループの都合に合わせて調整することでした。プロジェクトを通して500人を超える児童・若者と作業しましたが、創造性ワークショップを開く当館の制作スタジオ内でグループ全員のスペースを確保するのは至難の業でした。その間CPF'sを確実にサポートすることもまた重要な課題でした。

このプロジェクトにおける当館の最大の強みの一つは、プロジェクトと当館全般にもたらされたCPF'sの経験・発想・熱意でした。自身が抱えていた心の健康の問題について率直に語ることのできるその能力には清々しさが感じられ、プロジェクトの成功の鍵となりました。あるCPF'sは次のようにコメントしています。「私個人としては、職場での体験を役立てる機会を頂けたことは、気分を一新させるような貴重な体験でした。アートが心の幸福にどんなふうに役立つかを人に教えることができるようになったことで、私自身も精神的につらい状況について理解し洞察を得ることができましたし、今後の仕事や個人的な作業に目的を見出すことができました」

今回の取り組みでは、当館のプロジェクトに初めて参加する学校がほとんどでしたが、主な参加理由の一つはロックダウン後に不安や精神的な不調を訴える生徒が増えたことでした。ある教員は「幸福と心の健康に対し、アートを土台とした取り組みを策定・促進する方法についての理解を深めたい」という理由を挙げていました。ワークショップに関する教員のコメントには「誰もが参加でき、設備等も整っていた」「児童がエモーショナル・リテラシー(心の知性)の幅を広げることができた」というものがありました。また、プロジェクトに参加したことで学校全体の文化資本が高まり、当館の収蔵品がさまざまな方法に利用できることに興味をそそられたという方々もいれば、プロジェクトの「マインドフルネス・セッション」から着想を得て、学校で同様の手法を用いてみるという方々もいました。

今回のプロジェクトは，創造性に関するセッションを考案し遂行する自信に関し，全てのCPF'sにポジティブな影響をもたらしました。注目すべきはCPF's全員が当館や他の団体でクリエイティブ・ファシリテーターの仕事を続けていることです。ペアを組んだ芸術家との間に築かれた絆は、今後もこの仕事に携わる中で強力な支えとなり続けます。あるCPF'sは次のようにコメントしています。「これほど多くの才能・計画性・技能を備えた人々に囲まれて過ごすという素晴らしい機会に恵まれ、多様なチームが一体となって今回のようなプロジェクトを実施する方法を学ぶことができ、コロナ禍にあってもアート関係の仕事に就くことは無理な話やあり得ない話ではなく、むしろその逆だということを知ることができました」

当館もまた、このプロジェクトにより地域の創造的なコミュニティーと新たな関係を築いたり、関係を強めたりすることができました。地域の初等学校6年生(年齢的には日本の小学校5年生に該当)の児童が中等学校に進むための支援を行う「幸福ワークショップ」を実施するために、サザーク区カウンシル(Southwark council)からすでに資金を確保しているのですが、どのような形で行うかについては「Together Through Art」プログラムで得た知識を生かし、実施の際には同プログラムでのCPF's・芸術家チームと協働する予定です。

【発表趣旨】

私が「アートを通じて集まろう（Together Through Art）」プロジェクトに参加して得た「幸福感」とは？

キンバリー・クッキー－ガム（英国）

アートを、癒しの形態として、自分の感情を操作する手段として、そして時には癒しの手段として見なせることが重要だと思います―それがポジティブなものであれ、ネガティブなものであれ。

私が「アートを通じて集まろう（Together Through Art）」プロジェクトに参加したのは、学生向けのアート主体のワークショップを企画するプロセスを通じて、私たちの指針となる基盤として使用された共同制作方法に非常に興味があったからです。このアプローチには上下関係が存在せず、そのためファシリテーターと参加者の両者とも経験からいろいろな事が得られる点に惹かれました。また、伝統的なアートを観察・処理する方法をさらに見つけて、若い人たちをクリエイティブなプロジェクトや興味に引き込むためのツールとして使用する方法を学びたいと思っていました。新しいやり方で伝統的なアートワークとつながる手法を見出したかったのです。

学生との交流で私が最も印象に残っているのは、ギャラリースペースに入ったときの学生たちの反応です。これまでダリッチ・ピクチャー・ギャラリーや美術館を訪れたことがなく、初めてその空間を体験する学生もいました。私は、その空間に対する驚きや興奮に満ちた学生たちの最初の反応に興味を覚えました。
また、学生が私たちの説明に対していろいろな反応を示した様子を目の当たりにしたことも非常に貴重な経験でした。学生によってさまざまな解釈や手法で自分たちの蛇腹折り本を作っていた姿はとても印象的でした。

クリエイティブ・ピア・ファシリテーター（Creative Peer Facilitators）となったことで、私はワークショップを指導する自分の能力とアプローチに自信を持つことができました。現在は、あらゆる年齢層の方々に向けて、自分のかぎ針編みのワークショップを推進しています。今後もこのプロジェクトで学んだことを取り入れていきたいと思います。

共同制作方法は、私自身とさまざまな年齢層の受け手との間で調和のとれたバランスを維持する上で役立っています。私たち全員がお互いからどのようにして学ぶことができるのかという点を、より明確に理解できただけではありません。

プロジェクトに参加することで私が得た幸福感は、実際に絵画の中に存在する色彩、形状、形態、題材を観察し、それを私たち自身の経験に結び付けることによって、伝統的な形態のアートがどのように再解釈され、癒しに使うことができるかという点に対するより深い理解でした。

このプロジェクトは、他のクリエイター仲間と協力して、学生たちがワークショップの流れを理解して楽しく参加できるようにすることで、自身のコミュニケーションスキルの向上にも役立ちました。
また、コラボレーション、チームワーク、そして新しい制作手段を若いクリエイターたちに紹介するプロセスを通じて、強い帰属感を得ることができました。

【事後アンケート】

質問　以下の❶～❹について、感想（気づきや発見、勇気づけられたことなど）をお聞かせください。

❶ ニッキー・クレーンの事例報告

● こうした取組が国家規模の大きな枠組みで動いていることにまず驚き、この分野の英国での位置付けが、私が思っている以上に高いのだと気づかされました。

また、質疑応答でも触れられていましたが、取組の財政面での裏付けや、プログラムの費用対効果など、お金の話もしっかりと聞けて良かったです。気になったワードは、やはり「エビデンス」で、行政の制度のなかに導入していく上では、どこの国であっても重要なことなのだと改めて感じました。

● 心の健康と芸術が結びつけた魅力的なプログラムが、国家プロジェクトとして進行していること、そして、芸術が心の健康を保つ／改善するという仮説に、いくつかの有意な結果が出ていることに、まず勇気づけられました。

今後さらに実証実験が進み、その結果が広く共有されることになれば、博物館と社会の距離感・関係は、より親密なものになれるのではとの希望を感じました。

● エビデンスの重要性とそれを発信することの重要性を、お話を伺って改めて感じました。もう一つ、これだけ大規模なプロジェクトを動かしていくには、資金はもちろんのこと、その目的を分かち合えるミュージアム、あるいは芸術領域以外の連携先が必要だということも実感しました。研究者あるいは学芸員には、横のつながりを持てる視野の広さが必要ですね。

❷ ジェーン・フィンドレーの事例報告

● ニッキーさんの国家規模の枠組みの事例報告を聞いた後に、ジェーンさんのローカルな実践の事例報告を聞くことで、英国のこの分野の全体像を垣間見られたように感じました。印象的だったのは、ジェーンさんの、CPFやアーティストの方々、若者、学校関係者らに対する敬意、尊重する態度です。取組を進めていく中で、さまざまな人たちをリクルートしたというお話がありましたが、多種多様な人や機関と協働していく中では、お互いに尊重し合い、信頼関係を築くことが重要だと改めて思いました。

● 若者向けプログラムをこれまでもやってきていますが、こちらが意図せずに、メンタルヘルスに問題のある若者が参加して元気になってプログラムを終える、ということがありました。従来の活動の視点を変えると、新たな活動への道が開けると、目からうろこでした。

❸ キンバリー・クッキー -ガムの事例報告

● CPFというユニークな立ち位置からのご報告は、大変興味深かったです。プロジェクトの中で行った具体的な活動のご報告も、もちろんおもしろかったのですが、それらを通して今後の活動に生かせるスキルを身につけることができたと言っておられたところが特に印象深かったです。美術館側が一方的に利益を享受するのではなく、関わる人たちに良い効果を継続的にもたらしているのだと思いました。

シンポジウム終了後に、インスタグラムで素敵な作品を見させていただき、心惹かれました。

● お二人の発表を通じてハッとさせられたのは、このようなアートプロジェクトの実施において、アーティストや博物館職員等の、いわゆるファシリテートする側に起こった、自己理解やコミュニティへの帰属感・安心感の獲得などの心理的な変化が、プロジェクトそのものの成果として共有されていたことです。

自分の勤務先でワークショップなどを実施する時、成果として重視されるのは参加者の満足度や変化であり、主催者側の満足感や感情は、「個人的な感想」「やりがい」として成果・評価の外に置いていかれがちです。外から見ると、Giveとtakeの役割が固定化されているようですが、実際には、ワークショップや鑑賞会をファシリテートする時、自分自身が多くを受け取っていることを日々実感しています。そして、そのときに得られた充実感は、次の事業に繋がっていくことも確かです。

自分は、（給料を受け取って業務をしている身として）何かそれ以上のものを受け取っていることに引け目を感じることがありました。しかし、人とその表現との関わりの中で、人の心は安らぎを得ることができる、そして、そういった心の問題は、決して些末なことではない、という実感をもって活動に携わることで、より多角的に活動の意義を捉えられるようになるのではないかと、お二人の事例を通じて感じました。

● ジェーンさんの「活動の目的と理念」の話が、キンバリーさんの話で、非常に具体的によく分かりました。やはり、当事者の話は説得力がありますね。また、キンバリーさんが日本に来て、かぎ針編みの作品を制作したという話には、大変親しみを感じました。おかげで、遠いイギリスの話ではなく、日本の自分たちにも引き寄せて考えることができたように思います。

❹ シンポジウムの質疑応答

● さまざまな人や機関と協働して行く際には、関係者間のニーズの違いを調整し、擦り合わせていくことが大切とニッキーさんが言っておられました。たしか「ステークホルダー間の緊張感」とも表現されていたかと思うのですが、やはり博物館・美術館側が独りよがりになってしまってはうまくいかないのだと感じました。

一方で、「美術的なクオリティは求めていかなければならない」と言っておられたのが強く印象に残っており、そこのバランス感のむずかしさは日本でも共通するところだと感じました。

適切なところに、適切な方法で成果をアピールする重要性についても改めて納得しました。また、皆さんがプロジェクトを本当に大切に思いながら取り組んでおられる様子に感銘を受けました。

● 人のWellbeingという、形に見えないものを追求するにあたっては、自分たちのプロジェクトの成果を、客観的な形で示していくことが大切であることを改めて理解しました。短期的に成果が出るものではないからこそ、プロジェクトを持続可能にする必要があり、そのためには経済的・人的な支援と理解の輪を広げる必要がある。確かニッキーさんがおっしゃっていた、「感情に訴えかけるプレゼンテーション」（たとえば映像など）と「客観的な価値づけ」（科学的な実証データなど）の両輪が必要だというお話は、実際的に取り入れたいヒントでした。

● 資金の話は今回興味深かったです。「日本なら」とつい考えてしまいました。ステークホルダーが誰かを見極めるのは重要ですね。ミュージアムの人間はもっとその目を養う必要があると感じると同時に、国や自治体の補助金がもっとフレキシブルに使えるようになればいいのに・・・と思いました。

❺ 今後の活動

● 今回、英国の事例を聞いて、進んでいるなと思った反面、悩みどころや課題には意外と共通する部分があるのではないかと思いました。これまでは海外の事例は、あまり積極的に見てこなかったので、今後は視野を広げて見ていきたいと思いましたし、職場でも共有していきたいと考えています。

私自身、学生の頃に精神疾患に罹患した経験があり、その時に経験したことや身につけた知識は、今の仕事ではあまり活かせないかなと思っていたのですが、今回のシンポジウムを通して、もしかしたら何かつなげていくことができるのかもしれないと思いました。すぐに具体化することはできませんが、あえて避けたり、蓋をしたりせずに視野を広くもって進んでいきたいと感じました。

世界中に博物館・美術館に関わる先達や仲間がいるというのは本当に心強いことですね。

改めてそのように感じることができ、前向きな気持ちになれました。ありがとうございました。

● 現在、美術館に勤務しています。勤務館で実施している教育普及プログラムでは「何かを伝える」「知識を得てもらう」ことを何かと優先してしまうのですが、その場にいることの安心感や、充実感そのものに焦点をあてたプログラムに取り組んでみたいと思いました。美術館には、美術作品があるだけでなく、アーティストや、ボランティアや、様々な人のつながりがあります。そういった個がゆるやかにつながることを、しっかり肯定できるような場・機会をつくってみたいです（漠然とした考えですが）。

すぐにできる一歩として、アートの活動は、皆がgiver・表現者になり得る場であり、だからこそ私たちのwellbeingに貢献できる可能性があるというアイデアを、いま一緒に仕事をしている方々とも共有していきたいと思いました。ワークショップ等の事後アンケートで、「今の気持ち」を尋ねる項目があってもよいのでは、考えています。

キンバリーさんが来日された折には、ぜひ彼女のワークショップに参加してみたいです。